271

110

始

271-110

家庭教育

市川源三著
下田次郎著

兒童保護研究會

大正
13. 1. 21
内交

家庭教育目次

緒論……一
第一節　最初の家庭……一
第二節　家庭の意義……四
第三節　教育の價値……七
第四節　教育の誤解……一二
第一章　遺傳と教育……一七
第一節　人の發育……一七
第二節　ユーゼニックス……二〇
第三節　ユーセニックス……二五
第二章　家庭の教育者……二九
第一節　父と母……二九
第二節　老人……三四

第三節　兄弟……三七
第三章　知識の門戸……四〇
第一節　目の缺陷……四三
第二節　耳の缺陷……四七
第三節　咽喉と鼻……四八
第四章　兒童の頭を働かせよ……五一
第一節　言語の發達……五二
第二節　觀察と實驗……五六
第五章　兒童の運動と遊戲……六一
第一節　運動……六一
第二節　遊戲……六三
第六章　幼稚園の保育……六六
第一節　其の利害……六六
第二節　保育事項……六六
第三節　保育の問題……七三
第七章　幼兒の日常生活……七八
第八章　家庭教育年中行事……八一
第九章　休日と其利用……九四
第一節　日曜日の利用……一〇七
第二節　暑中休暇……一一〇
第十章　個人差と教育……一一三
第一節　健康の程度と體育……一一四
第二節　氣質の種類と德育……一一五
第三節　知性と知育……一一八
第四節　學科の嗜好……一二三
第五節　素質と教育及職業との關係……一三一
第十一章　低能兒と不良兒……一三七

第十二章　訓　練……一四四
第一節　訓練の意義……一四四
第二節　訓練の方針……一四六
第三節　訓練の方法……一四八
第四節　良　習　慣……一五二
第五節　賞め方と叱り方……一五六
第十三章　子供の惡癖……一五九
惡癖矯正法十案……一六三
第十四章　小學入學當時の家庭教育……一七九
第十五章　家庭の環境……一九二
第一節　幼兒の經驗は生涯を支配す……一九二
第二節　山村か漁村か都會か……一九四
第三節　家庭の教育的施設……一九六
第十六章　模範的社會生活……二〇一

第一節　國家生活の模範……二〇一
第二節　民本制度の模範……二〇二
第三節　理　想　生　活……二〇四
第四節　社會改善の出發點……二〇七
第十七章　兒童の發育標準……二一〇
第一節　心身の關係……二一〇
第二節　身體の發達……二一四
第三節　精神の發達……二一〇
第四節　治療よりは診察……二一八

家庭教育

目次

家庭教育の實際目次
緒論　教育上より見たる家庭……一
第一章　家庭に於ける體育……三
第二章　家庭に於ける知育……一二
第三章　家庭に於ける德育……一五
家庭教育の實際目次終

家庭教育

東京府立第一高等女學校長　市川源三

緒論

第一節　最初の家庭

下等の動物にも親子はあるけれども、親と子との共同生活即ち家庭と云ふものが存在して居らない。親は子を産んでも、自分が子を産んで居ることを知らず、又子供の爲に何等努力をして居らない。然るに鳥類になると、玆に初めて親子關係が生じ、親は子の爲に養育上の努力をし、子も亦親を見做つて、いろ〳〵のことを覺える。鳥類が即ち家庭を組織した最初の動物である。

以上は動物進化の上から説明されることであるが、不思議にも教育上の言葉が鳥の所作を寫し

て居るので、之を立證することも出來る。例へば育つと云ふ言葉は卽ち巢立つであつて、巢から出ると云ふ意味である。又親が子を大切にすることをはぐくむと云ふ、これは羽にふくむと云ふことである。又習ふと云ふ字は羽の會意文字である。卽ち親鳥が羽叩きをする、それを子鳥が見て眞似をすることを意味したものである。斯の如く鳥類が初めて家庭を組織して居る。其の以下の動物にはこの例が無い。

さて又、鳥類以下の動物には夫婦關係がない。勿論雌雄と云ふものはあるけれども、彼等は唯だ生殖作用を營んだ瞬間の外は、全く別々のものである。折々雄が雌の迫害者となることすらある。然るに鳥類になると、雄と雌とは單に雌雄ではなくして、一方は夫であり他方は妻である。卽ち或期間夫婦關係を營んで居る。而して此の夫婦關係を營んで居る所の目的は何であるかと云ふと、子供を育てる爲である。春の暖かい氣候に會ふと一對の雄雌の鳥が會合する、さうして彼等は先づ適當な場所に巢を營み、それから雌が其の巢の上に坐つて卵を産み始めると、雄は或距離の所に番をして居つて常に敵を警戒して居る。一定の時期が來て雛が孵化すると、雄と雌とは

交互に餌を漁つて其の雛を養育する。此の場合に親子或は家族と云ふ關係が現はれて、實に麗はしい人間の生活にも見えないやうな狀況が見えて來る。猶ほ暫く餌を探すことを指導して居る。此の餌を探すことが出來るやうになると、何日の間にか雛は親鳥夫婦に離れてしまふ。そこで親鳥は第二回の生産育兒敎育に從事することになる。第二回の雛の養育も濟むころは恰度秋になるので、それから先は全く夫婦關係を解いて、更に群を爲して生活する。

此の鳥類の家庭には實に人間の理想とすべき點がある。それは嚴密なる一夫一婦の制度を有つて居ることであつて、卽ち排他性を完全に保持して居る。能く男女間の品行を愼むのを輕蔑する言葉に、鳥獸のやうであると言ふけれども、鳥は決して人間のやうな一夫多妻主義ではない。但し雛の養育期間が一月とか二月位の短い間である爲に、鳥の雌雄の夫婦關係の期間は隨つて短いのである。然るに人類に至ると、子供の養育期間が非常に長い爲に、夫婦關係に永續性を有することになる。夫婦關係の永續して居る點から言へば、人類の方が鳥よりは進んで居ると云へるけ

れども、而も其の排他性の上から言へば、鳥の方が人類より道徳的であると云つて宜しい。要するに、排他性と永續性のある夫婦關係と云ふものが、今日の道徳の理想として居る所であるが、其の道徳の理想として居る家庭の制度は、一體何を標準として居るかと考へて見るのに、全く子供の教育を土臺として成立して居ると云ふことが判る。若し教育と云ふことを主にして考へなかつたならば、家庭の存在も必要でないかも知れないし、又恐らく家庭と云ふものが發生しなかつたとも思はれる。社會主義者は折々共産主義を唱へ、共産主義の結果として夫婦共有主義を唱へる。理論上さう云ふ風になつて行くのかも知れないが、此の夫婦共有主義は、教育の不可能と云ふことになるので排斥せねばならぬ。人類の進歩を圖ることを否定する學説がある譯もないから、人類の繁榮を見ることを肯定して考へて見ると、勢ひ教育を中心として考へなければならぬ。社會主義の弱點の一が其處にあると思ふ。

第二節　家庭の意義

そこで家庭の根本義は教育をする場所と言ふことにある。卽ち家庭とは何ぞやと云つたならば、子女を教育する爲に父と母とが同棲して居る場所である。斯う云ふのが最も生物學的の意味を有つて居る定義であると思ふ。

處が、人間の子供は他の動物に較べると非常に弱い。言換へれば獨立生活を營む爲には非常に薄弱である。他の動物は生れると直に自ら歩んで自ら餌を探すことの出來る動物もあり、或はある期間母の哺乳を受けて居るが、間もなく獨立して食物を求めることが出來るのに、人間に限つて獨立するまでの準備期が非常に長い。野蠻の社會にあつても、尙ほ十五六年は必要である。稍々文明になると約二十年を要する。二十年を壯丁（成人）の標準となつて居るのは、其れを意味するのである。併しながら文明が尙一歩進んだならば、二十年でもまだ獨立することが出來ないで、二十五年經たなければ成人に達しないと云ふやうな時期が來る。さう云ふ風に子供の獨立する期間が長い爲に、隨つて家庭に　夫婦間の永續が必要になつて來る。加之、一方に於て、段々人類の生活は困難になつて來る所から、家庭と云ふものが經濟的の意味を濃厚に有するやうに

なつて来て居る。即ち家庭は經濟的に夫婦互に扶助する場所であると云ふやうになつて来た。さうなつて来たけれども、それは畢竟二次的のものであつて、若し男女各々經濟的に獨立し得る人に、妻は要りませんか、夫は要りませんかと、尋ねたならば、直に其の意味が明かになることである。

斯の如く家庭の根本義は教育である。子女教育の爲に家庭が起つたのである。然らば學校教育と云ふものは何う云ふものであるかと云ふに、學校教育は此の家庭教育の延長に過ぎない。教育は本來家庭の任務である。又家庭の兩親が教育することが最も適當である。併しながら文化の進むに連れて、家庭の父母の爲し得ざる點が生じて來、又父母の教育に對する努力の上に過不足が生じて來る。其の父母の實力の足りない所を補ひ、又教育に對する努力の不足に對して、これを補ふ爲に學校教育と云ふものが出て來た譯である。教育と云ふと、とかく學校教育を主にして考へるがそれは間違であつて、何處までも家庭教育の延長で、唯だ不足を補ふに過ぎないと思はなければならぬ。又教育者と云ふものは、元來親を以て理想とすべきものである。教育と云ふ言葉は、日本語では教へると云ふ、教へるのをしは惜むと云ふ言葉から來て居るので、惜むと云ふのは愛すると云ふ意味である。親が子を愛する、愛する餘り之を育てる、又之を教へ導く、親人の愛を持つことは、他の人には甚だ困難であるが、親の愛があつて初めて教育と云ふことが始まるのであるから、矢張り教育者は親と云ふものを以て理想とすべきである。

總て斯う云ふ風に、教育を判斷して行くならば、教育に對する正しい態度を持つことになれると思ふ。

第三節　教育の價値

教育の目的は何であるか、子女の獨立生活と云ふことである。即ち子供を一人前の人間にすると云ふことが教育の目的である。一人前の人間とは何んなことであるか、先づ自己が生活して居る所の自然と社會とに能く順應して行きつゝ、自己の本性を十分に發揮することの出來るものと云ふことである。

人間には可能性と云ふものがある。此の可能性は若し他から妨碍がなかつたならば、活動して止まず、發展して止まる所のないものである。然るにそれに環境と云ふものがある。即ち生物の生活して居る周圍と云ふものがある。此の周圍が可能性に對して或は助長を與へ、或は又妨害を加へて居る。而して其の環境は之を別けて社會と自然とにする。處が其の社會と自然と云ふものの助けを受ける場合には、可能性の發展は極めて順境にある譯であるけれども、兎もすると自然若くは社會は其の可能性の發展を妨げることがある。そこで其の自然及び社會と徒らに衝突することのないやうにし、進んでは更に之を利用して行くと云ふことが、可能性發展の最も賢い方法である。其の衝突を避けるには如何にすべきか、それを利用するには如何にすべきかを指導することが、即ち教育であるから、教育と云ふものは、自然と社會とに人間の本性が如何に順應すべきかを指導するものであると言ふことが出來る。人類の本性の充實が即ち教育の極致であるといふて居るのは、人類の本性が環境に關係なく發展するものと考へて居る論ではなくして、自然と社會の壓迫によつて、今まで潜んで居たる或は隱れ居たる其の眞性を人類の努力に依つて、次第に開拓して行つて、さうして遂に人類の本性の充實を見る、其の努力が即ち教育の極致であると云ふ意味である。

それを他の言葉で言つたならば、眞善美を造り出さうとする努力、其の努力を人間に與へるのが即ち教育である。更に他の言葉で言へば、科學と藝術と道德との創作に人間を向上させて行くことが即ち教育である。斯う云ふことになるから、科學と藝術と道德とは、教育の三つの方面であると云つて宜しい。

然らばさう云ふ教育を何う云ふ方法に依つて實行して行くかと云ふと、所謂教育の方法であるが、それは勤勞と、學習と、遊戲と、此の三つである。米國では勤勞學習遊戲案と云つて居る。此の言葉は極めて簡單であるが、能く考へると、日本の教育は主にスタディーに限られて居る。プレーは甚しく乏しい。併しながら昨今遊戲運動も相當に發達して來たけれども、まだ學校に於て勤勞と云ふことは殆どない。勤勞のない證據は學校の設備で能く分る。何處の學校に行つても、兒童の勤勞する場所がない。之を米國のやうに各

種の職業が學校で出來るやうに設備してある國と比較すると、大變な相違を發見するのである。此の勤勞と學習と遊戲との三つに依らなければ、教育が出來ないと云ふことは、獨り學校教育ばかりでなく、家庭教育に於ても注意しなければならぬのである。併しながら此三點から眺めて見ても、日本の學校と家庭とが何方が教育的であるかと云ふことを考へると、寧ろ家庭の方が學校よりは教育的であると云ふことが分る。日本の學校は今言つたやうに、殆ど學習本位であつて、遊戲も勤勞もないと云つて宜い狀況にあるが、家庭は學習のみに限られて居らずして、相當に遊戲もあれば勤勞もある。處が、世人が教育を語る場合に學校を本體とする誤解から、兒童生徒に對して學習の外何事もさせない。家庭に於ても單に學習のみさせて、勤勞と遊戲とをさせないやうになつて來たのは甚しい間違である。

猶ほ再び人の本性と環境との關係を考へて見たい。人間の發育に必要なる要素は、卽ち其のもの丶本性と環境とである。本性がなければ、元々生物の發展はないけれども、併し環境がなければ、又本性の發達もない。本性の必要であるばかりでなく、環境も亦非常に必要あるものである。

例を以て之を說明して見るならば、玆に音樂の天才を有して居る者があるとする。けれども極く山間僻地に居て、少しも音樂を聽くことが出來ない。其所に大きくなつた人は、遂に其の天才を發揮する時期がなくて終つてしまふ。ただ蟲や鳥の聲音を能く眞似することが出來る、面白い人だ位の程度に終つてしまふに相違ない。然るに其の者が一度大都會の音樂の發展して居る土地に來て見ると、其の潛んで居る天才が俄に發揮して、非常に豐なる天分の所有者となると云ふことがある。それは全く環境の刺戟を受けて始めて發育したのである。環境の必要なることはこれでも充分に分るけれども、亦環境は如何に好くつても、其の人の本性に於て惠まれて居なかつたならば、才能の發達を見ることは出來ない。卽ち生れながらにして遲鈍なる者は、如何に澤山な金を掛け、如何に澤山の人の努力に依つて教育して見ても、依然として同じ程度に彷徨つて居ると云ふことで能く分るのである。此の事は昔は寧ろ正しく信じて居つた所で、瓜の蔓には茄子は生らぬと云つて居つたのであるが、一時教育が輕蔑されて來て、教育の力に依つて、人間はどうにでもなる、人間は白紙の如きもので教育の力に依つて、白くも黒くもなると考へられた時代があつ

た。けれども最近又遺傳學が進歩するに隨つて、其人の本性の動かすべからざる天分のことが分つて來て、教育も此天分を如何ともすることが出來ないと云ふことが十分に明瞭になつて來た。

それ等を說明することは後に讓るのであるが、教育を考へて行く上には大切なことであつて、天分の無いものを强ひて發育させようと考へるのは、白いダリヤを赤く咲かせようと云ふのと同じである。朝顏の蔓に夕顏の花を咲かせようと云ふのと同じことであつて、到底望み企て及ぶべきものではない。

第四節　教育の誤解

教育とは人間を獨立のものにすることである。獨立して生活し得ると云ふのであるから、無論人生の各方面を忘れてはならぬことを意味して居る。然るに兎もすると、從來の教育は或一方に偏する傾きを有つて居る。通俗には教育は只だ學問をすることと考へて居る人が幾らもある。學問で人間が生活し得るならば、それで宜しいのであるけれども、單に讀書と云つたやうなことでは生活の出來ないことは能く解つて居る。

第二に教育は德性を養ふものであると云ふ風にのみ考へた時代がある。卽ち人物を造る、其の人物と云ふのは道德的品性を養ふのであると云ふ風にのみ考へられた時代がある。今でも折々教育の目的は人品を高尙にするにありと解釋して居る人があるので能く分る。けれども道德だけで充實したる人生を送つて行けるかと云ふと、必ずしもさうではない。例へば身體が弱いと云ふ一言で、直に本人は其の目的を達し得ないと云ふことが明瞭になつて來る。

第三には教育と云ふものを、只だ經濟的生活を營む上に必要である、分り易い言葉で言へば衣食の道を教へるものであると考へて居る者もある。其の意味から言ふと、今日の教育は役に立たない、無用の事を學んで居ると教育を批評する者があるので能く解る。

さう云ふ風に、教育が、或は單に學問をするものだと考へ、或は單に品性を養成する事だと考へ、或は單に衣食の道を學ぶものであると考へられたけれども、それ等は何れも誤謬であつて、決してそんな單純なものではなくて、それ等を總て包括したものであると考へなければならない。

次に教育と云ふことは將來の獨立生活の準備をして居るものであると云ふ考である。獨立生活が出來るやうになれば、所謂教育は終りを告げたのであるけれども、併し幼兒、兒童を教育して居るのは他日獨立生活をする準備をして居るのだと考へたならば、それは間違である。幼兒には幼兒の生活があり、少年には少年の生活がある。それを其の時代々々に適當なる方法に依つて指導して行けば、其の結果一定の年齢に達して獨立生活が出來ると云ふのであつて、青年期に於て獨立する爲に子供の時に其の準備をして居ると云ふのではない。之を旅行に例へて見れば、二十歳の時に富士山に登る其の準備の爲に五六歳の時に外套を買つて置いたり、脚袢や足袋を買つて置くと云ふのではない。二十歳の時に富士山に登れる體力を得るには、五歳には五歳相應の運動をし、十四五歳には十四五歳相應の運動をして置く、さう云ふ意味に考へる可きである。

斯う云ふ意味に考へて來ると、子供の仕事には無駄がなくなる。一々其の時代に相應しい仕事であつて、それが又非常な深遠な意味を有することに考へられる。然るに青年の獨立生活の準備と考へると、子供のして居ることは何れも無駄事であつて、殆ど無用なことをして居るやうに考へてしまふやうになる。斯う云ふ方法に依つて教育すれば、子供に興味のないことを無理矢理に教へると云ふことになるのであつて、昔の教育、寺小屋時代に於ける教育は斯う云ふ方針でやつて居つた。であるから、寺小屋に入るや否や、直に庭訓往來、小學、大學とも云つたやうな本を讀ませた。それは何の爲かと云ふと、他日社會に立つて手紙が書けなくてはならない、人の道を辨へなければならないと云つて教へたのである。是は昔の物語のやうであるが、今の人々が自分の子供を見る時に、矢張り此の古い考が膠着いて居つて、折々子供の要求しない、但し自分は要求することを子供に向つて要求することがあるのは此爲である。

かうなると、一體教育と云ふものは、親が教へると云ふことでなくつて、子供が自ら進んで學んで行くと云ふことで無くてはならないと考へられるやうになる。昨今教育と云ふよりは學習と云つた方が宜しと云ふ議論も出て來、或は又教育は自學自習でなければならないと說き、遂に最近に於ては一の學級を拵へて、其處で大勢で教へて行くと云ふやうなことは宜しくない。それより

は、生徒各自が自分自身の案を立て、勉強して行くが宜しいと云ふ意見が出て來、これを稍々組織立つて始めて居るのが、有名なドルトンプランである。玆に再び、家庭教育が即ち教育の模範である。お手本であると云ふことが分る。何處の家庭に於ても、ドルトンプランを俟たずして、個人教授、否個人學習を實行して居るのである。家庭の教育の方が兒童の個性、心理を能く闡明することに依つて、一般教育の上に光明を與へるものである。

第一章　遺傳と教育

第一節　人の發育

身體が健康で頭腦がよく、その上性質の良い子供を持ちたいとは、總ての親の希望である。さう云ふ立派な子供を得るには如何したらば宜いか。抑々人は生れながらの天性と外部の境遇とに依つて左右されるものである。生れながらの性質と云ふのは、之を三つ算へることが出來る。第一は反射運動、第二は本能、第三は可能性である。反射運動と云ふのは、殆ど精神に關係のない隨意運動であつて、瞬きの如きものであるが、併し之を人間の力で抑へようと思へば抑へられないこともない。此の意味から心臟や胃の腑の運動と區別することが出來る。次に本能運動と云ふのは複雜なる反射運動である。即ち反射運動の一の結合である。而して其の運動の結果或一の目的を達するのである、即ち其の個體の利益の爲になる運動をすると云ふのが特色である。可能性

と云ふのは發育するに隨つて、頭が働く、手業が出來ると云ふやうなことであつて、數量が計へられるとか、或は繪が描けるとか云ふやなことを指すのである。

人間の生來の性質は大別して此の三作用にすることが出來るが、此の三作用は之を自然の儘に放任しては少しも發育しない。此三つの本性を外部から適當に之を刺戟すると、其處に發育があるのである。昔の人は人の性質が生れる前に既に定つて居ると考へて居つた。賢いも賢くないも善いも惡いも、皆生前既に定つて居ると考へて居つた。生後に賢くなり或は丈夫になつて行くのは、既に有つて居る性質を、卷物でも開くやうに段々開いて行くだけのものであると考へた。例へば樫の實の中には後に雲を突く程大きくなる樫の木が小さい形で入つて居り、卵の中には後に大きな鷄になるべきものが、極めて小さい形で縮少されて這入つて居ると、斯う考へて居つたのである。此考から見れば人間は自然に善くなる者は善くなり、大きくなる者は大きくなるので、外部の刺戟には關係がない。衞生も教育も何も用の無いことになつて、人の賢いことや善いことは、皆其の人の前世の運命であると云ふやうに考へてしまつたのである。けれども、此の考の間違であることは、今や既に爭ふまでもないことである。

處が此の思想に反對して、人の善くなるのも惡くなるのも、それは敎育の影響である、外部の境遇の影響であると云ふことを唱へ出した學說がある。卽ち十七世紀に於て英國のジョン・ロックは「總て人間の精神は白紙の如きものである。白くも黑くもどんな色に染めようと、それは自由である」と論じた。是卽ち敎育萬能論であつて、敎育の力に依つて人間はどうでもなる。言換へれば境遇に依つて人間は左右されるものであると云ふ考を言ひ表はしたもので、一時非常に勢力を占め、最近に至るまで一般社會を風靡して居つた。處が段々實驗的に研究して見るとどうも事實と反して居る。如何に苦心しても到底思ふやうな人間を造ることが出來ない。そこで段々と學問的研究を遂けた結果、玆に公平なる解決が出來て、結局人間の本質も大切であるが、又境遇も大切である。兩方の力の集合に依つて、其處に人間の種々なる個性が現はれて、而して人間の價値が定まるのである、と斯うなつて來たのである。」

第二節　ユーゼニックス

人間の生れながらの性質が非常に勢力のあると云ふことに氣が付いたのは、遺傳學の發達の結果である。昔から遺傳と云ふ事實は認められて居つたけれども、多くは輕んぜられて居つた。それに重きを置くやうになつても、大概は身體的の特質が遺傳されるものであると考へて、精神の作用は遺傳と云ふやうなことには無關係であると思はれて居つた。然るに種々なる學者、就中ゴールトンと云ふ英國の學者が出て統計的調査の結果、天才は遺傳的のものであると云ふことを明かにし、隨つて人間の種々なる性質も遺傳されるものであると云ふことを明かにした。それは從來の如く綜合的に遺傳の現象を見ずして分析的に遺傳の現象を調べたのに依つて判明して來た。更に進んでゴールトンは人間を善くして行かうと云ふには、先づ其の種を改良して掛らなければならぬと云ふ點に注目して往く學問を名けてユーゼニックスと言つた。此の說は忽ち各國に影響を及ぼしたが、就中米國に贊成者が出て來た。何事にも舊來の因習がなくて思ふ儘に改良の出來

る米國人は、直に之を研究し、更に法律上にまで之を適用することになつたのであるが、それ等の研究の內で面白い例が幾つも發見されて來た。

最も面白い例はジユークス家の系統である。今から二百年ばかり前に和蘭から紐育州の森に移住した者の末にマツクスと云ふ男がある。お人好しの怠け者であつたが、之と似た者夫婦のジユークと云ふ女があつて、それと結婚した。二人の間に子供が出來、更に其の子から孫が出來、其の血統が七十五年の間に千二百人の多きに達した。其の千二百人の子孫がどうなつたかを調べて見ると、約三百人が嬰兒の內に死んでしまつた、四百四十人が自業自得の惡疾で死んでしまひ、三百十人が乞丐浮浪の徒となり、七人は殺人罪を犯した、六十五人は窃盜を常習とした、百三十人は其他の犯罪を爲し、二十人が商工業を生計として漸く眞人間の生活をした、女の子の半數は醜業婦であつた、と。斯う云ふ結果が出て來た。所謂低能者の血統と云ふものであるが、如何に惡質の遺傳が其の一家を呪つて居るかと云ふことを證明するものである。

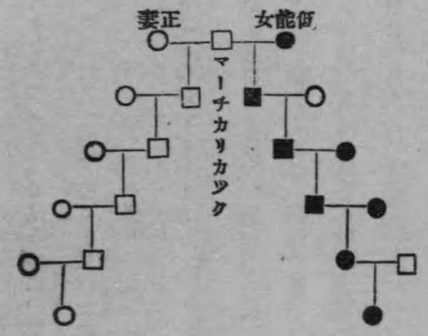
處が、其の反對の例としては、矢張り二百年ばかり前に、米國にジョナソン・エドワードと云

ふ學者があつた。其の妻も亦非常に智力優秀な人であつた。其の間に子が出來、孫が出來て二百年の間に千九百九十四人を算へた。其の人々の子孫がどう云ふ風な生活をして居るかと云ふに、二百九十五人が大學を卒業し、十三人が大學の總長となり、六十五人が大學教授となり、六十人が醫者となり、百四人が牧師となり、七十五人が陸海軍の將校となり、六十人が有名な著述家となり、百四人が法律家となり、三十人が裁判官となり、八十人が官吏となり、其の內一人は副大統領となつた。而して此の一門から出た書物が百三十餘種、雜誌が八十種あつた。

此の二例を比較して見て、如何に遺傳の力が一方を呪ひ、一方を祝福して居るかと云ふことが明瞭に分るけれども、是は或は教育の影響も加つて居りはしないか、卽ち一方は代々低能者であつたから貧乏生活、一方は學者であつたから立派な生活と云ふやうな、生活の影響が加つて居はしないかと云ふ處があるから、それを確める爲にもう一つの實例を擧げて見ることにする。

それはカルカク家の系圖である。カルカクと云ふのは假名であるが、一八三七年に死んだ人である。其の人は名も知れない低能の婦人と關係して子が出來た。其の子から五代迄の系統を調べて見ると、殆ど全部低能である。然るに此の人が後年正妻を貰つた。其の正妻から出た是も同じく五代の人々をずつと調べて見るのに、其處に一人の低能者もない、皆正常の人々である。是は全く同一の境遇に於て同じ教育を受けたに拘らず、一方は血液が汚れて居り、一方は血液が清いと云ふ理由で、斯の如く子々孫々に至るまで影響を及ぼしたとすれば、どうしても遺傳の事實に其の原因を求めなければならない。

家庭教育



□ハ男
○ハ女
■●ハ低能者
數字ハ世代ヲ示ス
（ゴダードの研究）

第三節　ユーセニックス

遺傳の力は斯の如く強い影響を人間の發育の上に及ぼすものであるけれども、併し境遇も之に對して強い力を及ぼすと云ふ例もある。三四百年前のことであるが、佛蘭西の兵士が森林を歩いた。すると一頭の狼が澤山の子を連れて水を飲んで居つた。試みにそれを驚かして見ると親狼が逃げ出した。後から子が尾いて逃けた。然るに一匹非常に足の遲い狼が居る。猶ほも追かけた所が愈々遲れてしまつた。そこで兵士は馬上より飛び下りて其の遲れたる狼を捕へて見ると、全く人間である。而も兵士を見て唸つて噛み付くやうな態度を示した。兵士は之を携へて巴里に歸り斯道の學者に提供した。是は狼に育てられて居つた棄兒であつたのであつた。立たせようと思つても立たない、這つて居る。又食物を料理して遣つても喰べない、生の物を遣れば悦んで喰べる。又遣るのにも直接口へ入れたのでは喰べない、目の前に投げ出さなければ喰べない。多くの人が寄つて集つて種々教育して見たけれども、教育が出來ない。二年ばかり經つて死んでしまつた。

此の子供をウォルフボーイと云つて有名な話であるが、未だに本統の解決が出來て居らぬ。想像する所、是は私生子か何かが棄られて、それを狼が自分の子にして乳を呑まして大きくしたものであらう。其時の智力は全く白痴同樣であつた。此等を想像して見るのに、人間の社會に居らなかつたと云ふ理由に依つて斯くの如き憐れなる狀態にあつたのではないか、彼が若し人間の中に居つたならば、人並の手業も覺えて居つたらうし、又御飯を喰べることも人並に知つたのであらうし、場合に依つては人並に物を言ひ、人並に種々の知識も發達して來たに相違ないけれども、狼の間に生活した爲に全く狼同樣のものになつてしまつた。是は境遇が如何に人間を左右するかと云ふことを最も適切に證明するものであると思ふ。

尙一層適確に之を證明する事實は、有名なヘレン・ケラー女史の例である。ケラーは耳が聽えず、目が視えず、卽ち全く三官者であつた。彼が社會に交際することは只觸覺と筋覺卽ち運動覺との外はなかつた。處が從來人間の精神的交通は目と耳とに依つて主に行はれて居たのであるから、彼は全く純人類の中に生存しながら山林獨住と何等違ひがなかつた。然るに有名なるサリバンと云ふ婦人が來て、此の子を敎育しようと云ふ意を起して、觸覺と運動覺の二つを利用して敎育を始めて見た。玆に人間との精神的交通が始まつた。其の結果ケラーの精神はずん〳〵發育して、遂に今日では大學を卒業し、立派な卒業論文を提出し、今は社會的事業に從事して、世の憐れむべき同胞者を保護し救助し居る程の立派な婦人になりおほせた。此等を見ると、ケラーが精神的刺戟を受け得なかつた時までは、全く低能兒同樣であつたが、一旦或方法によつて、精神的刺戟を受けた以來は、直に發育を開始して遂に立派な人物になつたのであつて、刺戟の力、境遇の力、敎育の力と云ふものがどんなに强いものであるかと云ふことも、我々をして深く感ぜしむるものである。單に遺傳の力ばかりを考へて居る說を充分に駁擊して餘あるものと思ふのである。敎育を改善して其の改善の結果、人間を善くすることが出來ると云ふことは、此の實例で十二分に證明するものである。

之を要するに、人間を立派に育てると云ふには、人の遺傳も大切であるが、併しながら人間の努力も亦大切である。兩者相俟つて初めて其處に大きな成功を見るものである。遺傳改良が

ならば境遇改善も必要だ。かくてユーセニックスと言ふ主張がユーゼニックスに對して唱導された。ユーセニックスとは必竟境遇を根本的に改善して見ようと云ふ議論に外ならぬのである。

第二章　家庭の教育者

第一節　父と母

家庭は理想的教育所である。否教育所の本家であることは上來屢々述べた。然らば家庭の教育者は誰であるか。家庭の教育者は父か母、祖父母か、兄弟姉妹か、其外にはない譯であるが、其の內で必ず家庭になくてならないものは父と母である。故に家庭の適當なる教育者は先づ父母と見なければならない。處が、此の父と母とが、一體何方が本當の教育者たる資格があるか、或は事實に於て何方が教育者として良い感化を與へて居るのであるか。支那の格言には、家庭には父と母がなければならない。而して父嚴にして母慈、嚴と慈と並び行はれて初めて教育が完成すると云ふやうに書いてある。是が果して正しい議論であるかと考へて見るに、實は甚だ意味をなさない說である。父は嚴格一方で、單に子供を怖がらせるものであると云ふならば、そんなもの

は、人を教育し得る力を有つて居るものとは言へない。又母は單に子供を可愛がる、子供を我儘にする、子供の言ひなりになるものであるならば、これも亦子供を教育し得る力のあるものではない。嚴格と慈愛とを分業的にすると云ふことは、有り得べからざることで、嚴格と慈愛とを併有する人に於て初めて教育的價値を有する。母親も時に嚴格であり時に慈愛に富む必要があり、父親も時に嚴格であり時に慈愛に富む必要がある。分業にすると云ふやうなことは以ての外のことである。處が事實に於てそれに極似した情況を今日迄の家庭教育に見たのであるが、それは全く父は外部に働いて、内部のことは全部之を母親に一任する。母親は又無教育であつて只子供を可愛がると云ふ外には、どう云ふ方針を以て教育して宜いか分らないから穩な子供は出來つこはない。そこで右に言つたやうな分業が生じるのであつて、決して今後の理想とすべきものではないのである。

抑々子供は兩親の内、何方に多く懷くかと云ふに、先づ母親を慕ふのである。母親は姙娠十箇月、又哺育一箇年、常に自分の手塩にかけるものであるから、自然子供を愛する情が强い、子供

も亦日常愛される母を慕ふ心持が非常に强い。其の後は父親も子供の仲間に入つて遊び、或は子供の喜ぶ物を買つて遣ると云ふやうなことをするけれども、それ等はさう大して子供の心に印象を與へない。子供の最も悲しい時最も困難に陷つた時には、必ず母親を呼んで救ひを求める。何處の家庭に於ても子供が病氣になれば、乾度母親を慕ふ、事實父親が醫學上の知識があつて手當が上手であつても、介抱は母親にして貰ひたがると云ふことは明かな事實である。稍々大きくなつて來て、此一家は父親の働きで支へられて居るものであると云ふことが分るやうになつても、猶は母親を慕つて居る。其の證據は種々な實例に依つて證明されるが、第一子供の書いた作文などに依つて證明される。尙一つの證明方法は犯罪者の場合である。本當の惡人と云ふものは、教誨師がいろ〳〵說法をして聞かせてもなか〳〵悔悟の樣子が見えない。然るに母親を喜ばせる考はないか、母親がお前のことを心配して居ることを知らないかと云ふやうに、母親を引合に出して教誨を進めて行くと、意外な效果を奏して來る例は幾つも發見されて居る。

斯う云ふ風に種々の方面から考へて見るのに。人間一生の間母親が其の子に對して及ぼして居

る感化力は非常に強いものであるから、此の意味に於て母親は單に慈愛深いものと云つたやうな簡單なものではなくして、子供の心の中に神として存在して居ると見て宜しい。母親を何よりも有難いものと思ひ、母親に對しては濟まないと感じ、又母親を喜ばしたいと思つて居るのである から、子供の心に映ずる母の姿と云ふものは、先づ神の姿或はそれに近いものと考へて間違はない。して見れば家庭に於ける教育者と云ふものは、先づ母であると見るべきである。母が中心であると考へて宜しい。

更に現今の分業の激しい社會に於ては、此の事實を益々確めるやうになつて來た。それは商業家或は政治家等の極めて多忙なる人々は、自分の子供の教育に從事することの出來ない境遇になつて來て居る。學校の父兄會等に於て折々現はれる事實であるが、父親は一週間子供の顏を見たことがない。一箇月娘と話をしたことがない。半年悴と話をして見たことがないと云ふやうな例さへ發見する。斯う云ふ父親は子供を教育することの出來やう筈がない。玆に於てか教育の全權は母親の手に歸したと言はなければならない。斯う云ふ境遇は善いことでないけれども、兎に角事實として今後幾十年かの間は必ず續いて居る現象と思ふが、さうなれば益々家庭教育に於ける母の權威といふものは偉重すべきものになる。

さうなると家庭に於ける教育者は先づ父母と云ふべきもの、寧ろ母であると定めて然るべきである。母であると定めたならば、家庭に於ける母の位置をもつと權威づけなければならない。全く父に命令されてやつて居るやうな日本の習慣、子供を叱るにも自分で叱るのではなくして、父親の命令に依つて叱つて居る。或は父親に叱つて貰つて居ると云ふ態度では、母の威力を振ふことが出來ないのみならず、母親の教育其物が非常に低い爲に、眞心があつても充分に教育力を發揮することが出來ない狀況にある。此の意味から女子の教育は少くも母となつて恥しくないやうに育てることが必要である。なほ私は將來に於ては、母としての教育がない者には、結婚を延期させる、卽ち育兒資格と云ふものが出來た女性に結婚を許可するといふやうな時期が來はしないかと考へて居る。

然らば父親には教育者たるの價値がどれ程あるか。無論、家庭に依つて種々な相違があらう。

例へば教育者のやうな家庭に於ては、父親は母親を補助して、母親と一心同體になつて子供の教育をすることが出來る。斯う言ふ場合は別として其他の職業に於て、父親は全く子供の教育を見ることが出來ない。斯う言ふ家庭に於ては夫婦の間で一定の方針を定め、妻が委任を受けて、二人でやる所を、一人でやつて行くと云ふやうなことになる。或は父親は自分の意見を一週間に一回、或は月に一回子供に能く言ひ聞かして行くやうな方法を採るか、猶ほもう一つは家庭會議と云ふやうなものを開いて、家庭を一種の自治團體と見て行く方法を採るか、それ等に依つて父の感化を子供に與へて行く外はどうも方法がない。

第二節　老人

日本は家族制度の國である。家族制度の國に於ては、多くの場合殊に地方の農家に於ては、祖父母と云つたやうな老人が同居して居るのが常である。此の場合に於て、老人の子供に及ぼす所の影響は大きい。世界を通じて古い時代に於ては、各國何れにも家族制度が行はれた。其の家族制度

の行はれた當時に於て教育に任ずるものは老人であつた。スパルタでもさうであつて、子供の教育は老人がして居つた。日本でもさうであつた。子供に乳を呉れるのは母親であるけれども、子供の面倒を見るのはお婆さん、子供に種々の教訓を施すのはお爺さんになつて居つたから、老人の教育に對する力は餘程強かつた。今も猶ほ從來の家族制度の行はれて居る農家に於ては、此の狀態は其の儘續いて居ると云つて宜しい。又老人を適當に利用して老人の能率を上げると云ふ意味から考へても、老人に子供を授けると云ふことは面白いことである。さう云ふ場合には教育の中心は養育を母親、教育を老人が引受けると見做して宜いのである。

處が、玆に一の問題は老人は常に固陋の考を有つて居るので、現代の思潮に合はない教育をすると云ふ事である。其の爲に兩親と老人との間に衝突が起る、卽ち子供を中心にして大衝突の起ることが今猶ほ頻々とある。之を如何に解決するかは難しいことであつて、恐らく一言や二言では盡されまい。結局若い者は老人の意志を尊重し、又老人も若い者の意志を尊重して、互に人格の尊敬が行はれるやうに導く外に解決の方法はあるまい。されば單に老人のすることが惡いと

解釋して居る說は誤つて居る。老人に依つて子供を教育して貰ふ利益が種々ある。一體老人と子供は或意味に於て多くの共通點を有つて居る。それは第一に頭の働きの遲いこと、又青年、壯年に見るやうな感情がなくつて、純粹に食慾か其他の欲望ばかりであること。其點から見ても、能く似て居る。かく兩方に共通點があるから、子供の友達として適當であつて、お伽噺に現はれて來るものも、乞食お爺さんかお婆さんで、若い男若い女は出て來ない。又昔の聖人などで子供と遊んで居るのが折々ある。聖人は全く此の世を離れて利害を忘れ、又男女の欲望を捨てたものであるが、さうなれば餘程子供の心に通つて來るものである。

越後の良寬和尙は子供と一緒になつて遊んで居つた所が、良寬が鬼になつて一同が宜しと合圖をするまで目を閉つて居た。處が、子供はいろ〳〵ふざけて居る內に、隱れんばうをして居ることを忘れて家へ歸つてしまつた。良寬はまだ宜しと言はないからと云ふので、何時迄も目を押へて夜が明けてもまだ其の儘待つて居つた。墨翁子供が遊びに來て、「伯父さんは何をして居るの」と尋ねた所が「お前方がまだ宜しと言はないから待つて居るのだ」と云つて、大に子供に笑はれたと云ふことである。如何にも聖人の心は子供の心に能く通ふ。さう云ふ難かしいことを言ふまでも無く、時々何か喰べたいと云ふことも、子供と老人は能く似て居る。話をする時にも若い人が話すよりは、老人が話す方を非常に悅ぶ。その譯は話の早さが丁度適當である。父母は忙しい間に早く片付けようと思ふけれども、老人は何も用が無いから悠つくり子供の相手になつて居る。如上の長所ある老人を邪魔にするのは間違つて居る。老人は教育者として價値がある。唯だ缺點は迷信があつたり、現代科學を理解して居らないことである。さえなければ適當に老人を補ひさへすれば、子供の教育の上に中々利益の多いものである。

第三節　兄弟

家庭の教育者として兄とか姉とか云ふものを考へて見ることも亦必要である。子供と子供と遊ぶと云ふことは自然である。子供に向つて良い習慣を付けようと思ふ時に、大人が如何に命令しても言ふことを聞かぬ。如何に叱つても、如何に賞めても賺しても言ふことを聞かないことがあ

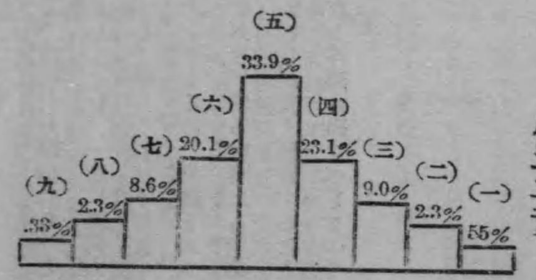
る。其の場合に最も年齢の近い兄か姉を通じて、其の子供に或事をさせようとすれば、直に成功する。例へば子供に蒸氣吸入をさせようと思ふ、處が、煙が濛々と立つて、子供は驚いて逃げ出してしまふ。そこで其の子供に最も近い兄か姉を能く諭してそれをやらせる、兄姉がやつて居るのを見て、其の子供も恐る〳〵傍へ來るが、いつしか自分も兄姉と一緒になつてやる氣になつて了ふ。

ロックと云ふ人が教育に關する議論を書いて居る書物に、毎朝一度便通をさせなければならぬ。併し便通が出來なかつたらどうするか、其の場合には隣りの友達を誘つて來て、友達にさせて一緒に眞似をさせる。さうすると釣込まれてやるものであると書いてある。二三歳違つても構はないが、近い年頃のものの及ぼす感化力は實に強い。兄弟は正しくそれに相當するものであるから、兄弟の感化は教育上見逃す譯にはならぬ。

然し又一方から見ると、悪い感化も與へる。即ち兄や姉のする悪戯を小さい子供が眞似をする。さうでなければしない悪戯を小さい者が仕出すことがある。又同時に兄や姉が弟や妹の眞似をして、拗ねたり泣いたりすることがある。或る教育學者は子供が三年隔き四年隔きに生れることは宜しくない。一度に五六人生んで教育したら宜からうと言つたことがあるが、如何にも尤な說である。然しそれは不可能のことであるから已むを得ない。

之を要するに、兄弟と云ふものは教育者としての價値は少いけれども、教育上顧慮すべきものではある。卽ち教育上兄弟のあるかないかに依つて子供の精神發育に非常の違ひが起る。兄弟のある方が能く發育することは明瞭である。兄弟はこれを教育者として見るべきものでは無いが、教育上等閑に附すべきものではないのである。

第三章　知識の門戸



人間の知的素質、卽ち智能(智慧)と云ふものは、鋭敏から遲鈍へ幾階級があつて、スタンフォード大學の研究ではこれに九つの階段をつけた。卽ち上圖の如くである。

圖の說明

横の軸は智能指數を示して居る。智能指數と言ふのは、生活年齡で智能年齡を除した商である。また智能年齡と言ふのは、生活年齡に配當した智能檢査成績を言ふのである。其の檢査に際し各年齡に應じて標準に難易の差のあるのは言ふまでも無い。そこで五歲の智能標準に五歲の子供が合格すれば正常の智能で一〇〇とする。四歲の子供が合格すれば智能指數一一五とする。もし七歲の子供で辛うじて合格したとすれば七一とするのである。右の檢査法は佛蘭西のビネーの立案で、ターマンが改訂を加へたものである。

次に横軸の上に置かれた方形は檢査を受けた全員の中に於ける各階級の智能を得たもの〻割合を示したものである。各階段に名前をつけるのは困難であるが、凡そ次の如くするのが通例である。

天才又は準天才	智能指數	
最上智	一四〇	以上
上智	一二〇—一四〇	同
平均智	一一〇—一二〇	同
劣等	九〇—一一〇	同
低能	八〇—九〇	同
痴愚	七〇—八〇	同
白痴	七〇以下	同
	二五以下	同

低能者の數は百人の兒童中に二三人あると言はれて居る。劣等者の數は二十乃至三十人あると

されて居る。

米國の軍隊で百五十萬人について試みた檢査の結果によれば、A B C+ C C_ D D_ E の八階段が區分され、各階段に分配される軍人の數は、次の如くであつた。

	將校	候補生	兵卒	文盲兵卒
A（最上智）	四八、四〇	三六、八	六、三七	〇、四六
B（上　智）	三四、六〇	三六、四	一二、三八	一、九五
C+（平均智上）	一三、八〇	一四、五	二〇、四八	四、四三
C（平均智）	二、九二	六、一六	二八、七九	一四、六七
C_（平均智下）	〇、二五	〇、九八	二一、四八	二九、一一
D（下　智）	〇、〇一	〇、一四	一〇、二四	四一、一六
D_及E（最下智）	〇	〇	〇、二二	七、八〇

斯様な階段は生れながらの相違であつて、人力の如何ともする能はざるものである。併しながら生來鋭敏の頭腦を有つて居つても、衞生殊に神經系の衞生を怠ると、其の素質を完全に働かすことが出來ないで、所謂假性低能になつて了ふ。苟くも兒童を教育すると云ふからには有つて居らない素質を伸ばすことは出來ないまでも、既に有つて居る素質だけは充分に伸ばして遣りたいものである。それに對して先づ知識の門戸とも言ふべき目や耳を充分に保護し、並に腦の働きの妨げになつて、間接に知識の入來を妨げるやうな不衞生のことを極力防禦しなければならない。

第一節　目の缺陷

目は知識の大切なる門戸である。目の働きの良否に依つて知識を取入れる上に、どれ程の影響があるか、二三の實例を擧げて、之を證明したいと思ふ。英國人ワーナーの報告に據れば、或一人の成績不良の生徒があつた。如何に檢査して見ても低能者であると云ふ證據が出て來ない。最後に不圖發見したのは、其の兒童の眼球が動かないと云ふことである。尚其の兒童の成績をいろいろ調べて見た所が、幼年時代に於ては相當の成績であつた。然るに上級に進むに隨つて成績が惡くなつた。殊にラテン語の成績は最も不良である。そこで種々調べて見ると、眼球が動かないために大きな字を視るときには首を動かして見て居つた。然るに段々上級に進むに隨つて板書が

細かくなつたので、首を動かして眼の運動を補つて居たのでは、首の運動は非常に大きな運動であつて、目の運動の如く細かなものでない。首の運動は大きく粗雑であつて所々拔かして讀むやうになつた。これが長い間續いた爲に遂に成績が不良になつたことが明瞭になつた。

此の報告の如きものは、實に人の氣の付かない問題であつて、如何に簡單なる故障が重大なる結果を將來するかを證明するものである。眼球の運動の不可能と云ふことは割合に例の少いことであるが、是よりもつと例の多いことで珍しい實例は沼波瓊音氏の子息の場合である。

瓊音氏は其の事實を雄辯と云ふ雜誌に於て「開眼」と題して發表して居る。其の話に據ると、同氏の長男勇夫君は小學一年の頃は大變成績が良かつた。段々大きくなつて五年になると不思議に不成績に陷つて、先生からも小言が出て來た。本人には一の病氣と思はしいものがある。それは爪の黒いことと、額の中央に縱に深い溝のやうなものが出來て居ることである。そこで母君はいろ〳〵心配して大學の皮膚科の博士に診斷を請うた。博士は種々診斷の結果、外科用の刃物を見せて、これが見えるか額が痛むかと聞いた。痛むと答へた。すると博士は分りました。兎に角精神病科の吳博士に診斷をお賴みなさいと云つた。母親は非常に心配して精神病專門　某氏に診斷を請けた。某氏は診斷の結果兎に角鎭經劑でも與へて見たらと云ふので、其の通りにしたが、大した效驗はなかつた。處が玆に不思議にも沼波氏が知つて居る澤と云ふお醫者さんがある。其の人は歌詠みであつた爲に、沼波氏が曾て訪問したことがあつた。其のお禮に偶々澤氏が來訪した。前々から勇夫氏のことが問題になつて居たから、序に拜見したいと云ふので、診斷して貰つた。先づ目を見た。見ると同時に「これは瞳孔が大きい、多分近眼だらう先天性の近眼だらう、」と云つた。然らばと父親の眼鏡をかけさせると、勇夫君大に喜んで、物が能く見える、此の家も見える、あの家も見えると驚いたやうな態度であつた。そこで眼鏡屋に行つて眼に合ふ十二度の近眼鏡を買つて與へた。歸り道にも喜びの餘り次のやうなことを言つた。「素敵だなア、あは餅、キリンビール、闘賣店、あの人は中折帽を被つて居る、髯をのばして居る」などと、兩側の看板や電信柱の廣告や往來の人などを片ッ端から批評して大變喜んで居つた。今まで頭痛がしていけない、額の邊が氣持ち悪かつたと訴へたのが拭ふが如く、皆癒つてしまつたと云ふ。家に歸つて

妹達が眼鏡をかけて居る兄さんの顔を珍しがつて見ると、僕は何でも見えるぞ、僕の目はX光線だ、と威張つた。これからと云ふものは、頭痛も癒り、額の疵も癒り、爪の黒いのも癒つて、成績も亦良くなつた。

斯う云ふ事實である。思ふに其の子は先天性の近眼であつて、年毎に次第に強くなつて行つたものであらう。一年生の頃は餘り近くもなく、その上黒板の字が大きい爲に能く見えたから成績が良かつた。所が次第に目が近くなると同時に、黒板の字は次第に小さくなつて來た。それで彼は段々五里霧中に彷徨つたやうな狀態になつて、成績不良に陷つた。それと同時に能く見ようと努力する爲に非常に目が疲勞し、疲勞した結果額に一種の不愉快な感じを起し、それを指の先で強く押へて其の不愉快なる心持ちを取去らうとしたので、額には疵が付く、額を押へた指の先は黒くなつたのに過ぎなかつた。此子が近眼であると知れば、是だけの大きな騷ぎは起らなかつたので、親及び學校の不注意が本人に三四年間の苦しみをさせた譯である。近眼と云ふ一つのことでも、それが注意されない時には是れほどの影響を與へると云ふことが能く分る。

其他、目の病氣で、學問を妨げるのは色盲の如きも其の一つである。色盲を癒す眼鏡はないから已むを得ないが、亂視の如きは之を補ふ眼鏡がある。其他の疾病で言へば、トラホームの如きも、慢性になると、眼が常に充血して、非常に不愉快な感じを與へる、尙一層慢性になると角膜を曇らしてしまふ。かくて視力が薄弱になり、遂に低能者を出すやうになるものである。

第二節　耳の缺陷

知識を取入れる門戸で、目に次いで大切なものは耳である。耳の遠いか近いかと云ふことも、隨分成績に影響がある。耳の遠い子供が後ろの方に居る爲に、教師の言ふことが完全に聽取れない所から、終に成績不良に陷つた例は澤山ある。それで聽力檢査の結果耳が悪いことが分つて、教場の前列に置くやうになつて、元の成績に戻つたと云ふことは、何處の學校でも多少の經驗を有たないものはない位である。

又耳鳴りのする子供がある。これも亦不愉快なものであつて、外部から來る音を精密に聽取ることが出來ない。これも亦原因は種々あるけれども、矢張り之を完全に癒すことに依つて智能の働きを高めることが出來る。

第三節　咽喉と鼻

鼻は一方から見れば知識の門戸である。我々の知識は主に目と耳から入るけれども、その目と耳から入る知識を更に補ふものは味と臭と手觸りの感覺である。その目も耳も手觸りの感覺も、用ふることの出來ない場合があつて、全く臭に依つて物を判斷しなければならぬ時がある。例へば牛乳は腐つて居るかどうかと云ふ時に、目で見ても耳で聽いても分らない。腐つて居れば毒であるから口の中に入れることが出來ない。全く鼻の力に依つて之を判別する外は無いのである。或は一の切れが木綿であるか毛織物であると云ふことや辨別する時に、目も耳も舌も指先も、到底之を識別することが出來ない。然るにそれを燒いて嗅覺に依つて、直にその伺れであるかを判斷

することが出來る。鼻も亦一種の知識の門戸であるが、日本の子供は此の鼻が大概冒されて居る即ち完全に鼻の働きを爲して居らぬから、嗅覺を良くすると云ふことは、教育上大切なことである。次に鼻は大腦の延長したものである。嗅神經は大腦の延長した尖端であるから、鼻が急性若くは慢性の疾患に罹つて居ると云ふことは、神經系に害を與へ、腦の働きを弱めるものである。此事は最近二十年前から注意されて來た現象で、寧ろ誇大に報告され過ぎて居りはせぬかと思ふほど重大視されて居る。鼻の病氣で先づ悪いのは急性の鼻加答兒即ち鼻詰りである。更に悪いのは慢性の鼻加答兒で、これも矢張り鼻が詰る。

それから鼻と咽喉の交叉點、即ち鼻咽腔に一の腺があるが、其の腺が腫れたのを腺樣增殖症と云つて、腦に惡影響を與へ、鼻の働きを悪くし、更に耳と口との交通路を閉鎖せしめて口呼吸を起し重聽を起すことがあるから兒童の教育上特に早く治療を要するものである。夫れから扁桃腺の肥大、扁桃腺は主に口を開いて呼吸する所から起る。或は又風を引いた後の手當の不十分からも起る、若くは不潔の塵埃の間に生活して居る所からも起る。日本の兒童の八分通りはこの扁

桃腺の疾病に罹つて居るのは、まことに嘆かはしいことであつて、この扁桃腺の肥大も亦鼻の呼吸を妨けて口の呼吸にし、口の呼吸をする爲に顏の形を惡くしたり、又腦の働きを惡くしたりする。是も種々實例のあることである。

知識の門戸は、其の他には皮膚就中指先にある。有名なるヘレン・ケラーと云ふ人は、耳は聽えず、目は見えず、ただ皮膚の感覺即ち指先の感じだけで、大學を卒業するまでの教育を受けた。故に指先も矢張り一の大切な知識の門戸である。それで指の先を大切にして置くと云ふことも必要である。然るに百姓の子供などは、常に荒つぽいことをして居る所から、指先に怪我をして、その觸覺を失つて居る者もあれば火傷をして、感覺の鈍くなつて居る者もある、或は腫物などが出來て全く指先の働かぬやうな者がある。指先の感覺で一番大切なのは人差指であつて、最も多く使はれる。その爲に怪我の多いのも亦人差指である。即ち最も大切なものが最も多く怪我をしたり、病氣に罹つたりする。これは特に注意すべき點である。殊に藝術家などには、この人差指が大切で、其の注意如何に依つて將來の幸不幸に關係することか尠くない。

第四章　兒童の頭を働かせよ

年毎に生存競爭は烈しくなり、益々智慧の銳敏、知識の豐富が要求されて來る。昔は競爭試驗は高等學校だけであつたものが、今や中等程度にも及んで、此處にも彼處にも選拔試驗があるのみならず、小學校に入學するのすら、或種の競爭試驗を受けなければならぬ場合が、都會にはあるやうになつた。玆に於てか兒童の頭腦を能く働かして、少くも本人の有つて居る天分を十分に發揮させることが大切になつて來た。入學試驗の準備と云ふやうなことで、大に騷ぐ親はあるけれども、その準備なるものは決して受驗前の一二年にあるものではなく、ズツと前の幼年時代にある。而して又態々準備として準備するに及ばない。不知不識の間に準備が出來るものである。以下知育の上で、殊に注意すべき點を述べることにしよう。

第一節　言語の發達

言葉と云ふものは、知識の交換に最も大切なものであるから、言葉を能く聽分ける力、言葉を使ひ分ける力を持たせることは最も大切である。兒童は滿一年にもなると、徐々片言を言ひ、滿二年を經過すれば、相當に要領を話すやうになる。滿二年位に於ては單語を並べて自分の思想を言ひ表はして居る。この言葉の發達する時期に於て、練習せしむることが必要であるのに、大抵の親は注意を怠つて居る。卽ち子供が親の完全なる言葉を聽いて、それを子供らしい言葉に表現する。卽ちお父さんと云ふ言葉をチャーチャンと云ふ、それはお父さんと云ふのを表現して居るのであるから、親は矢張お父さんと云つて居つて差支ないのを、却て子供の言葉に夥はつて親から先にチャーチャンと云ふ風になるが、これは間違である。併しながら若しどうしても子供が言へないならば、モツとやさしい言葉を教へれば宜い。卽ち英語のパパ或はママと云ふやうな言葉は最も發音し易いから、子供が發音の出來るものを、先づ十分に敎授して行くと云ふことが大切

である。お父さんお母さんと云ふ言葉は、發音に困難であつて曖昧のことを言ふから、言ひ易い言葉を代用するが宜しい。それから子供が單語を以て物を云ふ時代、これは子供の特色であつて、お父さん、僕、お菓子と只三つの單語を並べる丈であるが、それにちやんとお父さん私にお菓子を下さいと云ふ意味がある。此の時代に於ては單語より外に知らぬのであるが、其の言葉の調子と云ふものは矢張り違ふ、只單語を三つ並べると云ふのではなくて、子供の言葉の配列と調子が文章であるのと、文章でないのとの區別があるから、其の調子を正しく說明すると云ふことが大切である。

それから滿三歲から先きになると、簡單なる短文を以て話をすることが出來るやうになる。さうなつたならば、出來るだけ發音のやさしい意味のやさしい簡單なことを正しく敎へるやうに氣を付けてやる。この時代に於て、子供は二つの事件を並べることは、理解、記憶共に困難である。例へば『コップを持つて來てそれに水をお入れなさい』と云ふ命令は無理である。先づ『コップを持つていらつしやい』と命じて、コップを持つて來たら、次に『これに水をお入れなさい』と命

じなければならない。然るに父母はさう云ふことに氣付かず、『コップに水を入れて持つておいでなさい』と云ふから、この時代の子供にはまだ頭に入らない。隨つて子供は、其のどちらをもしない。小學校に入るやうにならなければ、同時に二つ以上續いた仕事を命ずることは出來ない。その位頭の働きは、初め簡單で段々複雜になつて行くものである。

言葉を教授するに就ての問題の一つに、此の時分英語を教へたものか教へないものかと云ふことで、多くの人から質問されることである。これは中々大問題で、どう決して宜いか分らぬ位の問題であるが、元來二つの國語を本當に自由にマスターすることは出來ないことになつて居る。隨つてどちらかは客になるものである。して見ると、子供の時から英語を教へると云ふことは、却て日本語其物を完全に使用することの妨げになつて、發音を亂す虞がある。尤も親が英語に巧みであつて正しい發音が出來るならば、詰り發音の數が殖えるだけであつて、多少の困難を感ずると云ふに過ぎまい。例へばラリルレロの如き、日本のルと英語のRとLと三つある。之を一々聽分けることは、相當骨の折れることであるから、小さい子供には困難である。全く不可能と云ふよりは、寧ろ餘り用の無いことに餘計頭を費すことになるから、モウ少し興味が出た後にやるべきものであると思ふ。

私の經驗に據ると、總て學問と云ふものは、矢張り一種の競爭心が動機とならなければならぬもので、他の子供がやらないことを、或家庭だけでやつて見ても、餘り油が乘らない。自分だけやると云ふことは、一度や二度は喜んでやるけれども、毎日其の爲に努力を續けると云ふことはしない。それで中學校入學準備として一人の子供には四年から英語を教へて見た、次の子供には六年の第二學期から教へて見たが、結局その結果は同じであつた。二年前から教へた者も、五六ケ月前から教へた者も入學の時の成績は同じ位のものであつた。やるべき時に十分力を籠めてやつた方が、本人も油が乘つてやり出す、さう云ふ所を利用する方が宜い。だら〳〵と緊張しない學習振は餘り感心しない。

第二節　觀察と實驗

知識を得る基は觀察であり、知識を確める方法は實驗である。觀察と實驗が近代の學問の基礎を爲して居る。故に子供には小さい時から觀察と實驗の二つを忘れないやうに、機會がある毎にそれを利用して觀察せしめ實驗せしむると云ふことが大切である。觀察及實驗に依つた記憶と云ふものは、實に大切なものである。一旦觀察か實驗に依つて得たものは、何日までも忘れない。そこで觀察と實驗とをさせるには相當指導が入用である。先づ子供が觀察し或は實驗をしたとする。それが終つた時、親は必ず質問を發して見る、卽ち觀察が充分であるか、實驗に間違がないかを質して見る。それが不充分であり誤があれば、訂正して遣ることが必要である。この觀察實驗の程度を確めるには、三つの方法がある。一は本人に話をさせて見ること、もう一つは質問を發して本人に答へさせることであるが、更に一の方法は之を繪に描かして見ることである。繪に描かして見た時には、口で云つた時とは、異つた表現法をする爲に、前に氣付なかつたことを、跡

で氣付くことがある、卽ち話をさせる、答へさせる、描かして見る。この三つの方法は子供の知識を確める上に於て必要である。玆に困難なことは一般の父兄にそれだけの學問があるかどうか。又もう一つの問題はそれだけの學問があつても、時間に餘裕があるかどうかである。餘裕がないと云ふ論があるかも知れぬが、是は生活の改善に依つて餘裕を造るべきである。

日本の家庭は整理が付かない爲に、無暗に忙しいのであるが、それは日常生活の改善に依つて樂に出來ると思ふ。又親がそれだけの知識がないと云ふ者がある。これは親も子供と一緒に學んで見ると云ふことで解決出來る。小學中學位の普通の知識は親も必ず興味を以て研究すべきである。而も子供と一緒に少し宛、やつて行くことには苦痛がない。又子供の觀察實驗を助ける手段方法が極めて大切であるが、それは家庭に於て動植物等の自然物を出來るだけ種類多く庭園に備へて置くことである。又日曜とか或は長い休の時に、海岸とか山とかに旅行する。或は遠足すると云ふこととが最も大切である。只變つたもの美味い物を喰べることばかり考へないで、自然を研究して豐富なる知識を養つて來ることに興味を有つやうに、親自らが先づ努めなければならない。

知育に就て、殊に日本の教育の缺點とする所は、獨創の力の乏しいことである、工夫して見る力の乏しいことである。この點は外國の教育者は非常に重きを措いて居る。プロジエクト、メソツトと云ふ方法が重んぜられて居る。この教育法はどうかと云ふに、子供が自ら一定の目的を立てゝ、その目的遂行の爲に種々なるものを工夫した結果、最後にその目的を達成せしむると云ふことである。子供の興味中心に依つて、子供の自由に仕事をさして行くと云ふことであるが、學校に於ては種々なる規律に服せしむる必要上、實行に困難の場合もあるが、家庭に於ては子供は少數であり、又親も氣を付けて居ることであるから、斯う云ふことは割合やり易いことである。その爲には出來るだけ種々の玩弄物を與へ、又子供が占領して居る或る地點を與へる、例へば庭の一部分或は部屋の一部分を與へて、彼が爲す儘にして置くことが必要である。此の場合には子供が下らないことをするかも知れぬが、それは彼として最善の努力を盡して居るのであるから、見て居て助言を與へることは宜いけれども、奪ひ取つて親がやつて見せるやうなことをしてはいけい。簡單に言へば「目を付けよ手は付けるな」と云ふ格言は此邊の教育方法を最も能く言ひ表して居ると思ふ。斯う云ふ點から日本の家庭を見渡すと、非常に不完全であつて、子供に與へる庭もなければ部屋もない。一般に人の運動にも適さない。子供が何かやらうと考へてもやる場所すらない。是等は小學校の教育をやる上に於て、非常に困難を感ぜしむる點であるが、各家庭に於て十分此の點に注意を拂つたならば、小學校教育の成績は今一層擧がることと思ふ。

序に具體的に各家庭をどう云ふ風に直すべきかを述べて見ると、先づ玩具としてはギルバードの理科の玩具、あゝ云ふものが家庭にあることを望む。あれが玩具かと思ふほど完全な物であるが、而も價はそれほど高くはない。これを兒童に與へると非常に面白い、これは稍々程度の高いものであるが、それをもう一層簡單にしたるものが良くはないか、幼稚園で與へて居る手藝品の如きものは、寧ろ程度が低過ぎて面白味がないやうである。又子供の部屋に黒板を置いて遣ることは大切である。子供は毎日變つたものを、それに書いて喜んで居る。庭には矢張小學校の讀本或は理科に現はれるやうなものを集める方が宜い。植物は四季常に花があり實が生ると云ふことが大切である。魚類としては金魚でも澤山であるが、動物は雞か小鳥を飼つてやる。只彼等が簡

單に生きて居ると云ふばかりでなく、鳴いて居たり、又卵を産んで孵化して居ると云ふやうな生活狀態を表はすものが宜い。蟹や蛙は强ひて家庭に置かなくても宜いが、猫又は犬はどちらか飼つて置きたい。其他の家畜では馬・牛・豚・羊・山羊等であるが、山羊を最も適當とする。山羊は非常に溫和しい、さうして乳も出る、飼方も簡單であると云ふことに依つて、之を子供の友達にするのも面白い。此頃地方に於いては、農家の副業として飼ふことが流行するが、子供の教育として非常に價値あることと思ふ。

第五章　兒童の運動と遊戲

第一節　運　動

兒童は元來惡戲好きである。運動好きである。兒童の運動を奬勵することは、寧ろ矛盾であつて、何故運動をしなくなつたかと云ふことを研究する方が急務である。兒童は必ず運動するものである。それが若し運動をしないと云ふ時は、身體の健康に故障がある。體力の弱い子供は直に疲勞をしたり、或は初めから運動をしない。斯う云ふ子供に對しては、直に氣分の惡い理由を取除くことが大切である。次に子供が運動をしない理由は、運動をする方便がない、場所がないと云ふこともある。場所若くは運動具がありさへすれば、子供は朝から晩まで、倦む撓まずやつて居る。どう云ふ運動具が必要であるか、身體の各部分を適當に運動せしむると云ふことと、餘り危なけのないものとを考へて、先づ第一に推奬したいのは約一坪位の砂場である。これは種々子

供の作業をするに適し、又相撲を取るに適して居る。次に木登り用の立木である。金棒とか、鞦韆とか云ふものも必要であるが、木登りはそれ等の總ての長所を極めて簡單な方法に依つて達するものであるから、木登りを奬勵することは最も宜い。それは只大小様々の本を眞ッ直に立てゝ置けば宜しい。これは男女を問はずやらせるが宜い。斯う云ふことは割合に簡單なことであるが餘り人が氣の付かないことである。

室内に於ては、室内鞦韆及び廊下の柱と柱の間を利用して金棒を通して置く、それに依つて運動が出來る。其外日本の家庭では遊戯としてはいろ〳〵あるが、餘り運動になるものはない。室外の運動としては、公園若くは郊外に出て盛んに跳ね廻る、草原に出て跳ね廻ることは必要であるから、外國の家庭に於ては廣い庭を持つて居る家は、皆草を生やして居るが、日本では苔を生やして居つて、其處へ足を踏込むと叱つたりして居るのは大なる間違である。

それから兒童が要求することは變化である。大人のやうに一つ事を何時迄もやつて成績を高めて行かうとか、記錄を高めて行かうと云ふ考はない。故に子供の遊戯に於て變化あることは、之を叱つたり攻めてはならぬ。遊戯の本能は變化するのを元來の特色として居るものであるし、流行に依つて始終變化して居る。それゆゑ餘り直段の高いものを宛行ふ必要はない。其代り直ぐ使はなくなつても詰らぬと云ふ考を持つてはいかぬ。

第二節　遊戯

子供は運動と遊戯の區別がない。彼等が運動をするのは決して身體を丈夫にしようと思つて居るのではない。只遊戯本能に刺戟されてして居るのである。遊戯の本能は總て動物には附與されたるものであるが、この本能をうまく利用することに依つて、其處から人間の働きを齎して來る。人類の大きな働きは子供の際に於て遊戯の内に自然に入つて居るものであつて、それから分化して、學習であるとか運動であるとか、或は藝術であるとか云ふものが出て來るのである。故に遊戯はどんなことであつても子供のして居る事柄は、皆大なる學問、大なる藝術、大なる運動の本を爲して居ると思つて、之を尊重しなければならない。その遊戯は第一に子供等自身發明

することを最も理想とする。餘り此方から難かしい形や教へて其の形に當嵌めて覺えさせると云ふことは、却て宜しくない。何でも自分で工夫をして樂んで行かせるやうにすべきである。

併しながら更に研究して見るに、其の遊戲と云ふものの大體の形は矢張り人生を模倣して居るのであるから、相當の指導は必要である。遊戲の內で昨今非常に奬勵されて居るのは兒童劇と云ふものであるが、兒童劇は家庭に於て行ふのに、決して不便を感じない。私などは二十年前から子供にやらして居つたのであるが、指導を要せずして子供は直に工夫をして着物を裏返しに着たり、遊さに着たり、穿くものを被つたり、被るものを穿いたり種々工夫をする。さうして面白く可笑しくやつて居た。併し昨今一般に公開して居る所の兒童劇は、子供が只大人の眞似をして居るのであつて、その藝術本能を刺戟することが乏しい。又餘りに人に見せると云ふことを主とする爲に仕組が大きくつて、勞して效のないと云ふことを感じた。あれは脚本だけを見せて貰つて各家庭でやるべきもので、有樂座や帝劇でやることはどうかと思ふ。又學校の問題としても、決して藝術其物が悪いのではなくして、其の爲に過大の勞力をするので、その子供に良くない影響

を與へるやうな場合が往々見える、これは結局小さい家庭に於てすべきものであると感じた。それ以上の大きな團體に於てやるには、矢張りそれだけ人を悦ばせるだけの設備と熟練とを必要とする爲に演藝者を犧牲にすると云ふ弊がある。兒童の遊戲に就ても亦運動に就て言つたと同じやうに、非常に變化に富んで居つて、常に流行を追うて變つて行くものである。それ故にどう云ふ遊戲を何日どう云ふ風にすると云ふやうなことを決定すべきものでなく、始終變つたものをやらせる所に面白味がある。只家庭としては能く教養し、能く子供を助け、決して邪魔がらないでさせると云ふ心得が必要である。其の心得さへあれば子供は自然と自己の本能を發揮して、相當面白味のある仕事をするものであると云ふことは、我々の常に經驗して居る所である。

第六章　幼稚園の保育

第一節　其の利害

家庭から小學校へ直ぐつゞくのは餘りに大きな變化である。其の中間に幼兒の教育所が必要であると云ふことは思慮ある人の唱へて居る所である。併し今の幼稚園は種々の不利益を伴つて居る。依つてまづ其の利害を論じ、次に改良方法を說かう。

幼稚園の利益　兒童が一人で家庭に居るのは、心身の發育上に大なる損害がある。職務に忙しい父親、家事に多忙な母親は子供と一緒に遊んで呉れない。さうなれば子供はつひ面白くないから何か惡戲をする、食物飮物をねだる。子供の惡戲は大人から見ての惡戲であつて、子供に取つては惡戲ではない。體育であり、娛樂であり、職務である。併し所謂惡戲をした爲に、子供は叱られるに相違ない。即ち罪なくして罰を受けると言ふのは此の場合である。若し惡戲をしないで

居れば、必ず何か飮食に耽つて居る。心ない親は子供を靜かにさせる爲に、時間外れに飮食物を宛行つて遣る。その結果は腸胃を害し、衛生上も宜しくない。然るに友達があつて一緒に遊んで居れば、別に惡戲もしなければ、又食物も要求しない。充分に遊び疲れた後に要求する飮食物は必要であるから、當然與ふべきもので、益があつても害はない。家庭に兄弟のない兒童は殊に斯の點に於て氣の毒な狀態に置かれて居る。縱令又兄弟があつても、其の兄弟が學校へでも行くやうになれば、一人取殘されることになつて、矢張り遊び相手がなくなる。斯う云ふ意味に於て幾人かの子供を集めて遊ばせる場所の必要なるは言ふ迄もない。

第二に、幼年時代即ち三歲乃至六歲まで、此の頃の子供は相當頭も働き身體も働く。此の時代の教育を無視して置くと云ふことは、一生涯に取つて非常な損害である。ペレー（Perez）といふ心理學者は、幼年時代の三年間は其後大學までの十何年間の教育にも勝る利益があると云つて居る。然るに今日の一般の父兄は子供を指導して種々なことを教へる時間もなし、偶々その暇があつても、それだけの素養がない。いつそのこと幼稚園へ送つて、之を教育して貰ふと云ふことは、相

當の利益であると言はねばならぬ。

第三に、この時代に於て、又子供は手業を好む時代であるから手業を覺えさせると云ふことも一生の上に大切なことであるが、これも亦普通の家庭では出來ないことである。

第四に、規律ある生活と云ふものは、小學校に於て餘に養ひ得るものではない。幼稚園は遊び場所、學校は勉學の場所と一圖に考へられて居る。一定の規律の下に勉學の出來るのは學齡以後即ち滿六歲から規律の下に服從して勉學が出來るやうに誰も說いて居るが、精神の發達と云ふものはさう急激に變化するものではない。徐々として發達して行くものであるから、小學校に入つて規律ある習慣に服從しなければならないと云ふならば、其の以前に於ても、多少は其の習慣を付けて行かなければならぬ。只その程合に於て相違ある位のもので無くてはならぬ。その規律ある習慣が家庭に於て養へるかと云ふと、家庭では養ふことが出來ない。殊に日本の家庭ほど複雜な不規律な家庭はないのであるから、此處で規律の習慣を養成することは殆んど不可能である。

第五に、友達との交際、即ち我儘を抑へて、他人と協同して事をすると云ふ心持。是も學齡當時になつて、初めて養成すべきものでなく、その以前から徐々に養つて行くべきものである。子供の時に我儘に育てられた者は、生涯それが性格の基調となつて寬大な同情の深いデモクラチックの性格を養成する上に大きな妨げとなるものである。

幼稚園の不利益　幼稚園の利益は凡そ以上の如きものであるが、玆に又相當に不利益がある。その第一は、幼年時代はとかく病氣に罹り易い體質を有つて居る。相當に大きくなつた後には、種々なる病毒に逢つても相當抵抗力が出來て居るから差支ないけれども、まだ極く弱い體質の時代であると、多數の子供と接觸することに依つて、種々の病毒を受けて來る。さうでなくとも、日本の子供は弱い上に、更にこんな奧れが加はつて來るのである。實際、幼稚園では猩紅熱に罹る百日咳をやる。家庭に置けば罹らねで濟む病氣を引受けてしまふと云ふやうな例がまゝある。これが一つの不利益である。

第二に、幼稚園は矢張り團體である。團體たる行動を取る爲に、家庭と學校との中間の狀態だからと云つても、さう旨く個人と團體との調和が取れるものではない。で團體の行動を取る爲に

個人の要求が無視される。それも、大きなものであれば自分の力でよく個人的要求をして協調することも出來るが、何分幼稚な子供であるから團體の影響は非常に強く及ぼして、害を與へる場合が折々ある。この個性の發達を妨げることは、精神の各方面に於てあることで、知能の上に於てもあれば、氣質の上に於てもあり、又身體の上に於てもある。個性の發達は段々文明と共に必要であると言はれて居るのに、その芽生を早くから抑へると云つたやうなことは感心出來ないことである。

第三に、實際上から見ても、通學の爲に甚だ困難を感ずる、殊に都會の如きは往復の道が危險な爲に必ず人を付けて遣る。これはその家庭にとつては少からぬ經濟上の損害である。此等が害の方面である。

今利害を併せて考へて見るのに、利益の數が多くて害の條項が少いやうであるが、併し何よりも先づ大切な身體に危害を與へると云ふ幼稚園の缺點は決して看過すべからざるものである。幼稚園が必要かどうかと言はれて、卽座に必要だとは答へられない譯はこゝにある。そこでその益を保存してその害を防ぐ方法が無いものか、これを考へることが急務である。

私の考へを述べて見よう。第一に現在の幼稚園は幼兒の數が多過ぎる、一組二十人以內に止めたいものである。然るに現在は四十名、又幼稚園全體の幼兒の數が百名若くは百五十名であるがこれも惡い、六十名以內に止めたい。卽ち一組二十人、全體で三組、六十人を定員とすべきものだと思ふ。

第二に、此の小規模の幼稚園の數を多數に設けて各所に置き、一寸隣りへ行くやうな氣分で通園の出來る樣にすべきものである。それから出來るだけ生活地位の同程度同狀況の者の集ることが必要である。かくて、能く衞生上に注意し、三日に一度位づゝ近所の醫者に健康診斷をさせる。

第三に、兒童の使用する器物や玩具のやうなものは、決して共同使用をさせないのである。今までの幼稚園はこの點に缺點がある。

それから幼稚園の保姆を採るには保姆の資格がなければならぬと云ふやうなことは要らぬと思

ふ。その幼兒を託す人々が認めて適當な者であれば、男でも女でも資格などの有無を問はない方が宜い。今の保姆は女に限つて居るが、男だつて差支ないと思ふ。成るべく自分で子供を持つてそれを育てたことのある人で、現に暇があり相當教育のある人と云ふやうなことを標準にしたい。

斯う云つて見ると、それは幼稚園ではないか、寧ろ幼兒の組合のやうなものでないかと云はれるかも知れぬが、幼兒組合で差支ない。我々の日常生活までが段々家庭的から共同的に移つて行く傾向は避くべからざるものと思ふ。幼兒の教育も共同的にして行くことは必要である、さう云ふ意味に於て幼兒組合と云ふものを拵へて保育して行くと云ふことが大切ではないか、此の制度が完成した曉には從來の幼稚園と云ふものは必要が無くなる。否從來の幼稚園は形が變つて行く、卽ち自分の子供を教育する素養もなければ、又幼兒組合を造る資力もない貧民階級の人々の爲に設けられたるものになつて了ふ。これを名けて託兒所と云つて居る。卽ち勞働者が朝出掛ける際に自分の子供を預けて世話をして貰ひ、夕方歸る時に連立つて家へ戻る。これはどうしても必要のもので、今日の經濟組織から考へれば無くてはならぬものである。澤山の子供を一所に集めると言ふ不利益はあつた處で、それは已むを得ないことで、各家庭の監督も何もない、監督どころではない、家さへないやうな子供を放つて出掛けて行く親に代つて、その子供を見てやると云ふことはどんなに必要かは縷說するまでもないことであらう。

因みに一言する。現に高等師範或は地方の師範校等に幼稚園が附設してある。その幼稚園は多數の希望者がある。併しこれは敵本主義であつて、幼兒教育の必要を認めてやつて居るのではなくして、その幼稚園に入學した者が小學校にも轉籍出來る、尙續いて中學女學校へも入學出來ると云ふやうなことを目的として入れて居るので、本書で論ずる幼稚園保育の問題とは沒交涉である。

第二節　保育事項

幼稚園の保育に何をするかと云へば、今までの所では談話と手技と唱歌と遊戲の四つに分れて居る。談話と言ふのはお話のことで、結局學問と言ふ程のことである。お話は規則では修身のお

話、庶物のお話とに分れて居るけれども、必ずしもそんな分類に依る必要もないのであつて、兎に角子供の學問と云ふことで、稍々程度の高い、そして整頓した系統だつたお話と解釋しなければならぬ。隨つてお話と云つて只言葉の上でお話をして居るものでもない。先生のお話もあれば生徒のお話もある、又觀察もあり、實驗もあり或は種々な實習もある。手技と云ふものは手藝品か使つて何か創作することである。これは手の技と云ふ手先きのことばかりで無く、全身を働かすことも加へて宜しいのである。之を大人の方で言へば勞働に相當するものであり、勤勞に相當するものである。農業の眞似をする、或は料理割烹の眞似をする、或は大工の眞似をすると云ふことも、皆手技の中に入るべきであつて、必ずしも傳統的の恩物、手藝品の取扱にのみ限つて考へる必要はない。遊戲と云ふものは是は名の如く遊戲であつて、運動をさせることであるが、この遊戲にも二通りあつて、自由遊戲と、共同遊戲とがある。それ等も只一日面白く元氣能く遊べば宜いと云ふことであつて、個人でするか、團體でするかと云ふやうなことは餘り論ずる必要が無い、寧ろ子供の喜ぶ凡ゆる遊戲をさせると云ふやうに考ふべきものである。尙彼の兒童劇と

云つたやうなものは、矢張り此中に入るべきものである。遊戲の本能と云ふものは、即ち藝術本能の基礎を爲すものであるから、藝術的のことは勿論此の遊戲の中ですべきものである。從來の幼稚園はフレーベルの影響を受けて無味乾燥なることをして居つた。却て家庭でやつて居た方が有益で面白いと云つたやうに思はれるほど悪かつた。そのフレーベルの考も次第に訂正を加へられて今日に於ては餘程變つて來たけれども、まだ中には古いフレーベル說に束縛されて居るものを、折々發見する。あゝ云ふものを棄てゝ我々の社會生活を極く簡單に又分り易くして子供に示すと云ふやうな方法でやつて行きたい。かくて子供の自由發達を出來るだけ伸ばしてやる。それには子供の創作を尊重するやうにして行かねばならない。外國の幼稚園の特色は各自の自由を尊重しつゝ、共同的工事をして行く、子供は實に樂んで居る。其の樣子は實に美ましく思ふ。

次に唱歌である。唱歌は遊戲と離るべからざるものである。子供は好んで歌ひ、又好んで遊戲する。唱歌の伴はない遊戲、遊戲を伴はない唱歌も無いことは無いが、兩者が合體すれば歡樂の極に達するのである。さて子供は何故に音樂が好きであるかと言ふに、實は何の理由も無いので

ある。恰も遊戯を好むが如く、音樂を好むのは、子供の本能なのである。

遊戯を授けるのは子供の健康を圖る爲のみと考へるのは間違ひである如く、唱歌を授けるのは唱歌を覺えさせる爲だ、耳をよくする爲だとのみ考へてはならぬ。いづれも本能滿足の爲である、自己表現の爲である。

從來の唱歌教授を見るに、下は幼稚園より上は音樂學校に至るまで、模倣をのみこれ事として決して創作的に指導しないのは何故であらう。綴方に於ても模範文模擬時代は遠うの昔に過ぎ去つて居る。圖畫に於ても紛本を模倣する所謂臨畫は早くも影をひそめて居る。これらは何れも創作の光に照されて、其のあさましい姿が看破されたのである。然らば同じく藝術の仲間入りをして居る音樂唱歌のみが獨り相變らず模倣のみを事とすべきで無いことは、智者を俟たないでも直ぐ知れることでは無からうか。

そこで幼兒に授くべき唱歌は、歌詞が先づ子供らしいもので無くてはならぬ。近頃流行する童謠には大別二種ある樣だ。一つは子供らしい子供の謠、一つは子供らしい大人の謠。童謠作者の

中には此の論戰が絶えない樣だから、我々門外漢が、それをどうのかうのと決定する必要は更に無い。吾々は幼兒に授ける歌詞は子供らしい子供の謠だと言へばそれで充分である。次に曲譜も亦子供らしいもので無くてはならぬ。但し曲譜の子供らしいと言ふことは曲譜が簡單なものだと早合點してはならぬ。曲譜が簡單でもさほど困難で無いものもある、曲譜が複雜でもさほど困難で無いものもある。要するに子供の力に可能であつて、子供を充分に引きつける力のあるものと言うて宜からう。

唱歌は日本ものか、西洋ものか、どちらを採るべきか、これも相當考慮すべき問題だと思ふ。歐米の文化を採入れるに汲々たる明治時代にあつては、ともかくも先づ洋樂を入れたのであらうが、日本音樂とてさう無價値のものでは無いと知れた今日、殊に音樂は其の國の言葉と連立つて發達したもので無ければならないことが解かつた今日、從來の如く洋樂一本調子もどうであらうか。童謠の發達と共に此等の問題も解決されて行きはしまいかと思はれる。

第三節　保育の問題

幼稚園で保姆の資格は、保姆の免許狀を有する者若くは小學校教員の資格を有して居る婦人と云ふことになつて居る。私の知つた範圍で考へて見るのに、保姆はまだ不完全である、其の不完全な點と言へば、

第一に、日本の保姆は怖過ぎる。私は米國の幼稚園を見たが、その保姆は實に優しいニコ〳〵した元氣の宜いものである。然るに英國に渡つて見ると小さい子供を頻に叱つて居る。保姆の態度は須らく米國流にありたい。次に保姆はモッと快活でなければならない。別に子供に對しておせ辭を言つたり諂つたりせよと云ふのではない。快活で天眞爛漫、如何にも子供の友達である と云ふやうな感じを與へる人でなければならい。日本の保姆は姿勢の悪い、むづかしい顏をした、元氣の無い顏をしたものが多い。かう云ふ人達は小さい天眞爛漫の子供に暗い影を投ずることと思ふ。これは非常に憂ふべきことである。斯の如きは保姆の身體の弱いのにも因るであらうが、又餘りに澤山の幼兒を取扱はせる爲に過勞に陷つて居ることに原因するかも知れない。子供の生活は遊戲であると言はれて居る。フレーベルが初めて幼稚園を建てた時にも子供は遊戲時代である から子供に遊戲をさせなければならないと云つたのである。その遊戲時代を指導する者も亦遊戲家でなければならない、卽ち保姆の資格は先づ運動家であることが第一の條件でなければならない。氣輕に能く運動し、體育ダンスなど輕快に元氣能くする人でなければならぬ。然るに日本の保姆は無精で、たゞ口の先で兒童の世話を燒いて居るだけで、自ら進んで遊戲運動をすると云つたやうな人は實に乏しい。又父兄も快濶な謂はゞお俠な保姆を見て誠り宜いと思つて居らぬかも知れぬ。それ等は大きに觀察を誤つて居るものである。

それから私の見た所では、一番缺點とするのは科學の知識の乏しいことである。歷史とか小說とか云ふやうな方面の讀書は充分にし、その方面の知識は相當有つて居るが、斯う云ふものに取扱つて居らない。幼稚園の保姆もさう云ふ風つた人々は總て事物及び社會上の現象を科學的に觀察し、之を解釋し說明すると云ふ科學者であつて欲しい。然るに多くである。モッと自然物を

の保姆は自然現象を見て能く分るやうに說く所の力を有つて居らぬ。若し知識があればたゞ難かしく言ふだけで、之を面白く聞かせると云ふ力を有つて居らぬのが非常の缺點だと思ふ。

第七章　幼兒の日常生活

幼兒の日常生活をどう云ふ風にして行くのが理想的であるか、偖りに一日の生活に就て書いて見る。

朝

朝目が覺めたならば、（その時間のことは後で述べる時に一緒に說く）直ぐ起せと云ふ論と、目が覺めても少しの間、床に置けと云ふ論と二つある。日本流に言へば目が覺めて床の中に置くことは、人間が懶惰になつていかぬ、直ぐに起す習慣を造るが宜いと云ふのであるが、併し神經衰者の說に依ると、人間は目が覺めてもまだ充分に頭に血液が注がれてない、約十五分位床の中に居つて起きる方が宜しい、と云ふのである。如何にも日本のやうに幼兒を武士道的に扱ふことは神經衛生の上に害があると思ふ。

次に朝一定の時間に目が醒めなかつた場合にどうするか、種々と起し方がある。普通に言ふと

夜具を剝いでしまふ、或は冷い物を顔に當てる、或は搖つて起すとか云ふやうなことであるが、元來子供は充分に必要だけ睡眠を取れば必ず目覺時計の如く目を覺すものである。睡つて居るのはまだ其の必要があるからである。それを起すのは衞生上有害であるが、已むを得ず起すと云ふ場合は出來るだけ注意をして起す必要がある。それについて或教育者の主張し且つ實行した方法は、子供の枕許で靜かに面白い樂器を奏して、段々その樂器の音を强く烈しくして遂に子供をして目を覺ますに至らしめることが最も良いと云ふのである。凡そこれ位まで注意したならば睡いのを起しても大した害を與へないだらうと思ふ。

次に朝起きたならば、直に床の上で冷水摩擦をさせるが宜い。日本の如く寢室に湯殿の附いて居ない所では、洗面所まで出掛けて行くとか、或は湯殿まで出掛けて行くとか云ふことは、子供には負擔が重過ぎる。床の上で冷水摩擦をするのが最もよいと思ふ。冷水摩擦は何歲位から適當かと云ふことに就ては、まだ一定して居らぬやうであるが、健康な兒童であれば滿四歲からで宜いと云ふ實驗家の報告である。稍々弱い子供であれば七八歲以後にした方が宜い。それ以前は乾いたタオルで拭つて遣つて、これに代へる。夫から口を漱ぎ顏を洗はせることは勿論やらなければならないが、口を洗ふ時に齒磨粉などを用ふる必要はない、只適當な刷子で洗へば宜い。齒磨粉を用ふる代りに、食後常に嗽がせる方が一層有效である。それを日本では齒磨粉に一種の信仰を附會けて、どんな子供でも齒磨粉を使はなければならぬものゝやうに思つて居るが、それは間違つて居る。

朝飯

朝飯を喰べる前に、少くも三十分、出來るならば一時間の餘裕があつて欲しい。けれども、これは必ずしも必要ではない。朝飯を最も多く喰べる子供は健康の證據である。朝飯が喰べられない子供は弱い、これは間違のない健康診斷法である。何故かと云へば、睡眠中に十分消化されて胃の腑に何も滯つて居ないならば必ず空腹であるに相違ない。所が腸胃の惡い子供は胃に不消化物が殘つて居る。その爲に朝起きても少しも食慾が出て來ない、朝飯のおいしいかまづいかゞ健康の羅針盤であると云つて宜しい。

朝飯はどう云ふ風な物を與へるか、第一に果物を與へるが宜い、食前の果物は最も必要である。一體果物は子供に取つては最も大切なるものである。これは是非遣らなければならない。然らば果物は何時與へるか、歐羅巴では食後の所謂デザートコースの時に與へて居るが、米國では食前に與へる。何方が宜いか、醫學上から云へば食前の方が良い。即ち最も子供に必要なる榮養物が吸收され易いことと、又一種の刺戟物があつて食慾を昂進せしめることと、これから考へれば、食前に與へるが宜い。果物はどんな物が宜いかと云へば、無論新しいよく熟した物が宜しい東京の如き大都會の果物は餘り適當でない、即ち棚ざらしで新鮮でない。又東京まで持つて來て賣らない爲には半熟の物を輸送する處がある。果物の中で最も適した物は林檎・苺・蜜柑・梨・柿・葡萄の類であつて、餘りに酸味の多い夏蜜柑の如き或はバナヽの如き或は店頭にあつてその表面に蠅などが附き易い水蜜桃の如きは宜しくない。

又胃腸でも痛めて居る子供には生の果物を與へないで、之を煮てジヤムにして與へるが宜しい。又それ程でない場合には細かく切つて種々な果物を混ぜて、所謂シチユード、フルーツにして與へるが宜い、外國就中米國では此のシチユード、フルーツが流行つて居つて、又非常に好味しいものである。

食事の內容は家に依つて種々違ふので一言で云ふことは出來ぬが、若し出來るならば朝にオートミール鷄卵等を與へたい。西洋流に言つて見れば、それとパンを燒いてバタを附けた所謂トーストを與へたら適當だらうと思ふ。日本の食物では御飯と味噌汁と鷄卵、其內で一番鷄卵が大切であるから、他の物は除いても宜しいが、鷄卵は是非與へなければならぬ。食後は約三十分位は靜かにして餘り騷がせないやうにすることが大切である。又食後直に能く嗽させることが必要である。これは朝起きて嗽するよりも猶ほ有效であるけれども、世人は餘り其の必要を感じて居ない。

それから午前中何をするか、幼稚園へ行けば、幼稚園の課業があるが、家庭に於ては何をするか、これは午後の仕事も同樣、勤勞する事と學問する事と遊戲することゝ、此の三つでなければならぬ。尤も時間を定めて、これは勤勞である、これは學問である、これは遊戲であると云ふやうにする必要はないが、其のしぐさに勤勞があり學習があり遊戲

があるやうにしなければならぬ。

晝飯

日本では晝飯を正午に喰べるから幼ない者に食前に間食を遣る必要があるけれども、大きくなれば、間食を遣る必要はない。外國では一時頃に喰べさせることが多いから、十一時頃に必ず間食をとつて居る。晝の御飯はどう云ふ物を與へるか、これは非常に美味いものを與へてよいやうにも考へられるし、又極くあつさりした物を與へてよいやうにも考へられるが、大人の家庭生活と合せ考へて見ると、晝は簡單にして宜からうと思ふ。幼稚園へでも行くならば、バタパン牛乳が良からう。或は魚と御飯、若くは細かい肉と御飯とで宜からうと思ふが、これに加へて新鮮な野菜物を與へることが最も必要である。併し日本の野菜は生で喰べるのは甚だ危險である。何故かと云へば人糞を肥料にするからである。人糞は肥料分がなくて病毒の危險が多いから今後人糞を使用しないやうにしたいと思ふ。然るに世人は人糞に對して一種の迷信があつて、非常に役に立つものの如く考へて居るのは間違である。野菜のうちで何が

好いかと云へば、成る可く軟かな芽生や苔と云ふやうなものが宜しい、それが多くのヴイタミンを含んで居る。

食後口を嗽いだり、晝く靜かにして居るべき事は、朝飯の場合と同じくである。

午後の仕事はこれも亦午前と變らない、子供の仕事に午前だから午後だからと云ふ區別はない。但し夜の食事迄に少し時間が多い、胃の腑は大概四時間經てば空になるから、正午に喰べて六時に夕飯を喰べるのでは、二時間も胃の腑が空になる。此の時子供は必ず空腹を訴へるに定まつて居る。されば三時から四時の間に間食を喰べさせるが宜い。之を與へるか與へないかと云ふ議論もあるが、年齡に依つて判斷すべきものであつて、子供の內は當然與ふべきものである。然らば何を與へるか、これにも亦、種々議論もあり、研究もあるけれども、一方經濟上の都合を考へ、又營養上のことも考へて、一番良いのはジヤム附パンである。子供は甘い物を要求するから甘い物が必要である。又本當の食事でないからカロリーとか榮養とか云ふことを主にしない、美味しくて消化の良い、さうして跡で害のないものを標準として考へる、牛乳を與へれば尙宜しい。

家庭で少し割烹でも出來る家であれば、種々な菓子を造つてやることも宜しいが、買つたお菓子の内には餘り良くないものがある。例へばビスケット、ミンツ、ドロップスの如き、酸味・薄荷・肉桂等の入つて居るものはいかぬ。餡物――餡は豆であつて蛋白質を有つて居るけれども、それに混ずる所のものが悪い、悪い砂糖を用ゐたりする、又餡は非常に腐敗し易い。その腐敗を防ぐ爲に種々の薬品を投じてある、それが非常に有害である。飲料ではサイダーが有害である。無論、酒は一層有害である。白酒にしても害がある。子供に飲まして宜いものは白湯である。白湯でなければ、カルピス、甘酒が最も良い。お茶の類で云ふと番茶に麥湯が一番安價で適當である。子供が咽喉が渇いたら番茶に砂糖を入れて飲ませるが宜い。麥湯も宜しいが腐敗し易い。兎に角腐敗し易いものは注意を要する。

夕飯

夕食は大概の家では六時に與へるが、夕食は一日の中で最も御馳走のあるべき時である。日本では夕食に一番御馳走を喰べる。西洋でも今はさうなつて居る。肉を油で揚げた物は避けなければならない。子供は喜ぶが害がある。それから胡椒の如き刺戟物の入つたものを子供に與へてはいけない。酒は葡萄酒でも有害である。其他は朝食と晝食に於て注意した。

夜

夜寝る時間、これは朝何時に起るかと云ふことに連絡のあることで、睡眠時間は年齢に依つて長短のあるべきもので、最も短くて八時間、長くて十二時間、その間を適當にすべきものである。寝る前にどれだけの注意が要るかと云ふと、先づ五十倍の曹達水で含嗽をさせる。又目を洗ふ必要もある。寝る前に身體を摩擦してやると云ふことは大切なことである。殊に少し體質の弱い子供にあつては、アルコールに等分の水を混ぜたもので拭いて遣ると宜い。かうすれば、夜中に痒がつて跳ぎ出すことがなくなる。それから日本には蚤といふ恐ろしい蟲が居て、子供の安眠を害して居る。日本の子供が西洋の子供よ一神經質であると云ふならば、明かに蚤と云ふものが影響して居ると思ふ。支那朝鮮には南京蟲が居る。併し此の蟲は喰べた跡では蚤數に劣らない苦みを與へるけれども、食付く前後に餘り苦しめない。所が跡では餘り痒くないが、蚤は食ひつい

た時最も厄いから、南京蟲より一層安眠を害する。私は支那人と朝鮮人に就て尋ねたことがあるが、南京蟲よりは遙に困る、寝る邪魔をすると云つて居た。日本には蚤が居ていかぬと云つて居つた。

蚤を退治するにはどうしたら宜いか、先づ疊を止めることが第一、又疊であつて蚤を退治しようと思へば鼠を退治することが第一で、蚤の根源は鼠にある。鼠を退治した上に四月の初から一週間毎に疊の隙間にナフタリン若くは石炭酸、樟腦と云ふやうなものを撒布する。さうすると蚤の幼蟲が死んでしまふから、遂に蚤は出ないやうになる。其の他、蚤の驅除法は疊全體を上げて之を日光に暴し、疊の下に新聞紙などを敷いて、其上にナフタリンを澤山撒いて置くと云ふやうなことである。併しながら多くの人の經驗に依つても、これだけではナカ〳〵蚤は退治切れない、その譯は、鼠が蚤を供給して居るからだ。猫も亦蚤の供給者である。何とかしてこの蚤を退治することを考へて見たい。

蚤の次に子供の安眠を害するものは蚊である。蚊帳を吊ると云ふことに依つて防ぐことが出來るけれども、蚊帳の隙間から必ず一二匹は入つて常に子供の安眠を害して居る。日本人は蚊を大して恐ろしいものに考へて居らないが、それは子供の時から蚊に食はれて免疫質になつて居る爲だらうと思はれる。西洋の人が日本に來て蚊に食はれると、日本人が南京蟲に食はれたよりモツと大きな害を受けて、腫れ上り其の跡が膿んだりするので深く其の害を恐れて居る。巴里園は已むを得ないとしても、都會では早く蚊を退治しなければならない。巴里には蚊が居らない、或時蚊が一二匹出たことがある。そこで學者が集つて此蚊はどうして出たかと云つて大研究をした位である。

子供を寢せる時には右を下にするか、左を下にするか、仰向けにするか、三通りあるが、仰向けが一番宜しい。さうして手足をスッカリ伸ばして寢かせることが必要である。これは夏冬共にその通りにするが宜しい。若し左か右かを下にするならば、初め右を下にしてそれから後に寢返りをさせるも差支ないが、最初左を下にすることは避けたい。夜具は成るたけ輕くて蒲團を厚くして軟かに置くが宜しい、掛ける物は毛布は理想的である。日本の枕は總て堅過ぎる。日本人は

子供の時から堅い枕をして居るから氣が付かないのであるが、西洋に長く居つて日本に歸つて來ると、先づその晩に苦痛を感ずるものは敷布團の堅いのと枕の堅いことである。それが爲に寢られないことがある。これから判斷して見るのに、子供の枕の軟かでなければならぬと云ふことが能く分る。

それから子供の寢て居る部屋は暗くして置くのが宜しい。併し子供は暗い所を嫌がることがある。それは習慣に過ぎないから、どうでも自由にして宜いやうだが、折々子供の寢て居る所を見てやる必要が起る、その爲に矢張り薄い有明のやうなものが必要である。子供のうちに就て置は種々注意するけれども、夜は餘り注意しない。所がその夜がナカ〳〵大切である。夜に於て注意することはどんなことかと云ふと、第一口を結んで寢て居るかを檢査することが必要である。若し口を結んで居なかつたならば、それは鼻に故障があるものであるから、速に手當を加ふべきである。それから五月から十月頃までは胃腸の爲に突發的に熱を起すことがあり、又十二月から三月頃までは風邪の爲に能く熱を起すことがあるが、多くは夜中に出るものである。而も腸胃の

熱の如きは夜中に出たのを翌朝までその儘放任して置けば危險に陷る。そこで夜中に一度子供の額に手を當てゝ發熱して居るや否やを檢査することは、親として必ず注意しなければならぬ。

第八章　家庭教育年中行事

兒童教育一日の仕事は前に述べたが、今度は一年に於ける其の折々の特に注意すべき事柄を述べて見よう。

一月

一月に於ては注意すべきことが二つある。

第一は飾り松竹の飾りの故實及び四方拜の儀式は歷史的知識を與へる上から見ても價値があるし、又敬神崇祖の精神を養ふ點からも價値のあることである。何故お正月を一月にするか、何故松を樹て竹を樹てるか、又餅を喰べ或は屠蘇を飲むか。斯う云ふ理由を知らないで過ごしてゐる人が多い。その爲に、此等の習慣が段々惡くなつて行く。その意味を知つてすれば惰慣必ずしも惡くは無い。或は又その精神を保存して外形を現代式に變へて行けば教育上利益の多いこともある。それ故に新年についても相當の研究を遂けて、然る後に、昔からの意味のある所を實現するやうに努めることが望ましい。

第二にお正月は即ち年の初めで、總ての仕事の初めの時であるから、一日の計は朝にあり、一年の計は元旦にありと云つたやうな意味をもう少し本當に吾々の生活の內に取入れて見たい。例へば家庭會議を開くと云ふやうなことも、此時にするが良からうと思ふ。又前年の生活を反省して、今年一年間の問題を豫定すると云ふやうなことも此時にするが宜しい。

斯の如き二つの大きい利益があるお正月を、世人は全く濫用してしまつて、正月と云へば只暴飲暴食をし騷いで遊んでしまふか、さうでなければ年始廻り或は年賀狀書きに全く之を空費してしまつて、靜に教育的の價値を發揮することをしないのは、甚だしい缺點だと思ふ。元來日本の人々は日曜日と云ふものを利用することを知らない。それと同じやうに、一年のお祝ひの日の精神を徹底することを知らない。只虛儀虛禮即ち廻禮であるとか、新年宴會であるとか、或は年賀狀書きと云ふことに徒費して居るのはまことに善くない風習である。之は是非とも改善しなければならないと思ふ。

二月

二月十一日は誰も知る如く紀元節であつて、日本國建設の祝日である。此日は丁度寒い頃である。お正月が濟み、又節分の濟んだ後の故か、意味の深い祝日にも拘らず、事實に於ては、國民の本當の心持には充分に滲み込んで居らないやうに思ふ。そこで生活改善會では、此點に着目して、いつその事、この二月十一日を元旦にしたらどうか、さうすれば季候の上から見ても、本當に春らしくあり、又農事の上から云へば、最も閑散な時であり、精神的に言へば國家の建設された日であるから、意味が深いと云ふのである、之には私も大賛成である。兎も角も古い習慣の節分の如きものに、人が力を入れる程の意味を以て、紀元節に對して本當の心持を以て之を祝ふやうにならないのは、たしかに憂ふべきことで、其の近くに種々な儀式のあることが邪魔になつて居るのであらうから、之を一所に纏めると云ふことは、如何にも必要なことだと思ふ。紀元節に限らず日本の三大祝日其他の祭日に於ても、どう云ふ風にお祝をするか、民衆の間にはまだ一定の形がないのも甚だ遺憾である。

「學校に於ては式を擧ゆる、其の式の次第も定つて居るけれども、民衆生活の内には、これが

本當に這入つて來ない。却つて節句などはチヤンと一定の形式があつて、如何にも祭日らしい。然るに國家の重大なる祝祭日なるに拘らず、只旗を建てる以外に、之を祝して居る心持が現はれないのは一大缺點であると考へて居る。どうか之を研究して紀元節らしい祝ひの形を而も全國的に定めたら宜からう。これが矢張り一の生活改善ではないかと思ふ。建國の祭日であるから、その意味を充分に加へて行く、各村或は各町にはお祭と云ふものがあるが、あゝ云ふものを統一して二月十一日にやる、日本の神々の祭日を皆此日にすると云ふことも、面白いことではないかと思ふし、又今花車と云ふやうな物は皆歴史的の物を現はすのが多いのであるから、此日に各所で一度に出すと、非常に面白い、意味深く感ずる。一體日本は殊に休まない癖に、祭日の數が多過ぎる。その譯はと云へば支那の習慣を取入れては、種々節句と云ふものを祝ひ、印度の宗教を取入れては波羅門及佛教の種々の祭日祝日を取入れた。其上に日本古來の式日があり、最近になつては西洋のクリスマスと云ふやうなものまで取入れて來たから、愈々以て遊ぶ日ばかりになつた。遊ぶ日が多いからどの日も遊ばれないで、本當に形式ばかりになつて、祭日であるか或は平

素の勞働日であるかと云ふことが、蔭張り區別が附かない。斯う云ふ不規律な生活をして居つては、生活の價値が減る、能率が低められて了ふ。

三　月

三月三日は桃の節句であつて、之を保存することは面白いことと思ふ。西洋では誕生日を祝ふ。日本には其の習慣がない。そこで古來の慣習たる三月のお節句を女の子の誕生日の祝日にしたらどうか、卽ち其の家の女性全體の誕生日としてお祝をすることにしたら面白いと思ふ。けれども日取りで考へると、三月三日は都合が悪い、學校で言ふと試驗の前であるし、殊に入學試驗準備の眞盛の時である。それから桃の節句と云つて、桃の花を飾らなければならないのに、大陽暦ではまだ桃の花が咲かない。生活改善會では之を三月三十日にしようと云ふ說を出して居る、これは面白い。昔と同じく、三三であり、又子供の試驗の終つた喜びの後であるから、至極よい改造だと思ふ。

桃の節句の日に昔から白酒を飲む習慣がある。この習慣は、今後は全く廢止すべきものである。すべて祝ひに酒を飲むと云ふ習慣は一切止めたい。然らばその代りに何を用ひるか、甘酒が最も宜しい。或はカルピスでも宜しからうが、一商店の販賣品を國民全體に使用せしむることは出來ないから、甘酒の如く何處の家でも自由に造り得るものを用ひるが宜しいと思ふ。元來女性は全く酒から解放されて、酒を飲むことを悪いと思ふやうにしたい。更に進んでは禁酒の運動まで起すやうな氣風を、此日に養ひたいと思ふ。然るに從來の習慣其儘に平素飲みもしない酒を今日飲まうと云ふのは、敎育上面白くないと思ふ。

それから雛飾りは非常に面白い、又意味の深い風俗である。恐らく女子の遊戲として、生涯の仕事を暗示して居るものとして、これ位意味の深いものはあるまい。殊にその飾られた雛壇は國家の元首を美化したものであつて、一方に於ては可愛い人形を弄ぶ心持ちと共に、一方に於て大きな國家の元首に對する、愛慕を感ずるのである。

五　月

五月五日は三月の桃の節句に相對して男の節句である。此の男の節句が從來は武を尙ぶと云ふ

意味に解されて居つたが、今後は體育を重んずることにしたい。此の節句に武者人形に限つて飾るのはよくない、刀や鎗や其他の武器を飾る事は止めたい。只古來の偉人英雄を飾り、これを崇拜する意味だけを殘したい。偉人英雄と言へば必ずしも武人でなくても宜しい。

元來三月の節句には宮中の俤を存し、五月の節句には幕府の俤を存したもので、德川時代にはそれももつともな風俗だと思ふけれども、今日になつて見れば、變更を加へる必要がある。それで桃の節句は女の誕生の祝日、而して前者には國家の元首を飾り後者には元勳を飾ると言ふことにしたい。斯うしたからとて、外形の上にはさしたる變更を加へる要も無い。只武器の飾りを止めればそれで宜いのである。又菖蒲を尙武にもぢつて刀劍槍等の武器を飾つたことは德川時代から起つたものである。元來菖蒲は昔は藥草として考へられたもので、平安朝時代にはあれを家の軒に吊して病氣を除けようとしてゐる。昔の人は病氣と惡魔は同じ種類で、惡魔が附いて病氣になると考へて居つたから、菖蒲をば軒に吊して置けば惡魔を避けることが出來ると考へたのである。その原始的の意味を擴充して衞生健康體育と云ふ意味にするのが宜い。卽ち五月の節句を體育日であると考へたい。その日に男の爲に誕生のお祝をする。男は社會に活動しなければならぬが、その活動に必要なものは身體の强健であるから、體育を奬勵しなければならぬと云ふ心持を以て、その日を祝ふが宜い。五月五日頃は丁度運動をするに適して居るから、學校などではこの日に運動會をするが宜しい。又家庭に於てもこの日に遠足をするか、郊外散歩をすると云ふやうなことを奬勵したら、最も面白からうと思ふ。生活改善會では五月五日を二十七日の海軍記念日にしたら宜からうと論じて居るが、私は不賛成である。海軍記念日に行ひ、之を全く軍事的に見てしまふと云ふことは、五月節句の本當の精神を失つて了ふ。德川時代ならいざ知らず、その前にもそんな意味の無かつたものを、その以後にもそんな必要は更にない。五日にして置いて體育奬勵をする。體育奬勵は軍事上にも利益があるから、自然之を尙武の目的として使ひたいと云ふ希望も達して居るわけである。

七月

七月七日は七夕祭、今では都會には廢つて居らるが、地方に於ては多少殘つて居る。この七夕祭

は保存する必要があるかどうかと考へて見るのに、これは殆ど保存の必要はなからう。强ひて保存すれば、之を女の子の學藝の進歩を祈る日と見て行くことも出來るけれど、さう云ふ日は別に立てる必要がないと思ふ。社會も自然必要を認めて居ないので、次第にさびれて行くのが、よく解かるのである。かう言ふものを復活する必要はない。

中元、盂蘭盆と云ふのは、支那の習慣が日本に入つたもので、崇祖の意味であつたものが、年二期の輕濟整理に利用された結果として、此日が非常に重大視されて來て居る。今日では祖先を祀ると云ふ意味は却て薄らいで、經濟上の決算期であると云ふことの方が强いやうになつたが、矢張教育上からは祖先を祀ると云ふことの方に重きを措きたいと思ふ。祖先を祀ると云つても、唯佛壇にお供物をして祀ると云ふやうなことでは意味が薄い、寧ろ此日に自分の祖先の系圖でも出して見せて、祖先の功勞のある人の話をして聞かせると云ふやうなことを、各家庭で試みたら宜からう。日本は家族制度の國だと主張して居る人があるが、併し學校などで調べて見ると、自分の家の系圖を知つて居る者が少い、全く知らない者の方が多い。系圖も知らないで、家族制度の國を振り廻すのは、何たる皮肉であらう。否家族制度が實際生活に適用されて居ないと云ふことを示して居るやうにも思はれる。併しながら教育の上から見ると、祖先を敬ふことに依つて、自分の家を尊ぶ、自分の家を尊ぶことに依つて人間は永久の過去を考へ、又過去の人々に對する感謝を感じ、自己の將來に於ける責任を感じ、未來の人々に對する義務をも痛感する。教育上からは家族制度は明かに效能があるが、法律上などには此の制度を利用するものよりは惡用するものの方が多くて、良くないと思ふ。今日の民法は家族制度の入れ方が惡かつた爲に、婦人は依然逆境に陷つて居るのである。

さて中元は精神の上に於て、祖先を大切にする、又自分も將來の人々の爲に氣を付ける、此の心持を教育に利用するが宜しい。それには一年の內、此盂蘭盆より外にはない。此時にもう少しこの意味を發揮するやうにして欲しい。只お供物をして門火を焚くと云ふだけでは、何も意味を爲さない。學校では盆に對して學生の心得を少しも教授して居らぬやうに思ふ。されば今の子供は盂蘭盆と云ふものの意味を殆ど知らぬで居る者が多くはなからうか。これは是非復活して行か

なければならぬ。それを復活して行くからと言つて、法律も家族制度に基いた規定を多くせよと言ふのではない。個人の自由意志を束縛したり、個人の發達を害したり、殊に婦人の位地を非常に低めたりするのは面白くない、教育上に重要視して居る場合には、法律上ではこれに觸れないやうにして置きたいと思ふ。

八月及九月

八月の十五夜及び九月九日の重陽は、今日は只好事者流に依つて保存されて居るだけで、一般には殆ど顧みられない習慣となつて來た。これはこゝに論ずる必要はないと思ふ。

十二月

暮、殊に大晦日は、昔は、此日に鬼遣をやつたのであつて、一年に於ける總ての惡魔を攘ひ捨て、全く新しい氣分に生れ出ようと言ふのである。此頃は鬼遣は二月の節分の日になつて、暮には全くさう云ふことの無くなつたのは、惜しいことである。殊に節分に鬼遣だけするのは面白くないから今後廢したいと思ふ、それを廢するに就けても豆撒きなどは大晦日にやるが宜いと思ふ。然るに何故福は內、鬼は外の豆撒きを大晦日にやらないかと云へば、これは經濟上の決算の日であると云ふやうな關係から、其方に多忙であつて、落着いて豆撒などが出來ないと云ふやうなことから來たと思ふが、決算を一日にしなければならぬと云ふことはない。前日から少しづゝ用意して居れば、さう云ふことはない筈である。旁々暮と云ふものをもう少し有意味に使ひたい。その有意味に使ふ邪魔をするものいと思ふ。殊に日本の懸買の習慣もずつと減らして行きたが、經濟上の理由の外に一つある。日本人は形式に拘泥して年始狀を暮の內から書く、郵便局もそれに對して早く年賀狀を取集めたりして居るのは甚だ宜くない。あれは寧ろ廢してしまつて、新年になつて自筆で書いたものを親戚や親友だけに遣る位の程度にしたい。商人は年賀狀を自分の廣告の材料に使つて居る。それで近頃殊に年賀狀と云ふものが殖えたのであるが、廣告と精神的交際と云ふものとを區別しなければならない。それで年の暮を本當に意味あるものにするには、どう云ふことが宜しいかと云へば、矢張り一年中の惡魔を拂ふと云ふ意味を殘すことである。惡魔を拂ふと云ふことはどう云ふことであるか、卽ち一年間に於ける自己の罪惡過失を深く反省

して、それを悔い改めて更に年の改まると共に新人となつて生れると云ふ心持を此日に起す。さう云ふ風に考へると非常に意味の深い日であるから、之をもう少し宗教的の深味を持つたものにしたいと思ふ。どうしたらば深味を持つか、私に定つた案がある譯ではないが、兎に角さう云ふものにしたい。さうして先づ家庭はすつかり煤拂をし掃除をして、散亂したるものを總て整頓する。今まで借りたものは返し貸したものは取つて、經濟的にも整理すると共に、精神上に於ても總て自分が一年間の行動中悪いことは深く神に向つてお詫をし、新年と共に新しく良いことをすると云ふ決心を立てるが宜からうと思ふ。

一般の人に望むのは無理としても教育上の利用法としてはかうありたいと思ふ。

第九章　休日と其利用

第一節　日曜日の利用

年に五十回餘もある日曜日が日本に於ては充分に利用されないで居る。元來日曜と言ふ休日が日本に入つたのは、歐洲と交際した後のことであるが、彼の國では有意味に使はれて居るのに、日本では其の意味を採用せずして、只その外形だけ採用して、空しく休んで了つて居る。されば今日日曜日と云へば全く官吏教員及び學校の生徒が休む日で、その他の人は少しも休んで居らぬ。休みを統一することは人心統一の上に大變大切であるのに、それが出來て居ない。これは人心を分離させて居るものと言つて宜い。

それから又假に此の日を休むとしたらば、どう休むのがよいか、眞に休息の意味を知らないものが多い。例へば婦人などは一週間溜めた仕事を此日に片付けようと考へ、男は此日家庭に於て

考へごとをしよう、書き物をしようと考へる。子供は此日に於て宿題を皆やつてしまふと考へる。これでは休日と云ふ意味がなくなつてしまふ。矢張これは西洋の習慣を取入れたものであるし、向ふの生活の上に於て極めて重大視して居ることであるから、その意味を採用することが必要である。西洋に於ても英國と米國とは違ひ、英國でもスコットランドと他とは違ふけれども、總てアングロサクソンの人民は此日を眞面目に取扱つて、一日營業を休み、又學校は無論休む、さうして午前中は殆ど本も讀まず眞面目に神を考へ、神に感謝して居る。午後になると或は教會に行く者もあれば、一家擧つて郊外散歩に出掛る者もある、又交際的訪問をすることも此日に當てゝある。結局此日は神に仕へ人と交際すると云ふ風に使はれる。これは必要なことではないか、勉強するのも宜いと思ふが、少くも精神修養の日を一週間に一回位拵へて置くと云ふことは、更に必要である。日本の一般の人々は學校教育を終つた後は死ぬまで遂に人間の教を聞かないでしまふ。毎日小言を言はれても滿足に行かないものを、十五六歳から後、死ぬまでも少しも人間の道を說かれないでしまふのは、國民道德の上に於て非常の缺陷ではないかと思ふ。我々はどうしても一週間に一回若くは月に一回は心を清める日があつて欲しいと思ふ。

西洋の人は之を日曜日にして居るのであるから、日本も日曜日といふ制度を採用した以上は、此日をさう云ふ風に利用しなければならない。少くも日曜日の午前中は教會に行くか、お寺へ行くか、若くは學校へ行くかして教を聽くことにしたい。教會はそれをやつて居る。お寺も學校も今後、日曜日の午前中は精神講話をすると云ふ風にしたらどうか。さうすると學校の方では日曜に仕事があるから、米國及び英國では土曜日も休んで居る。學校に通ふのは五日間になつて居るが、それ程犧牲を拂つて、日曜日を尊重して居る。日本は一向考へて居らない。是は日曜日に一般に講話を聞くと云ふ社會的習慣を新しく造らなければ、國民の道德がどうしても進歩しない。午前中をその仕事に當てゝ午後は一切仕事を休み、郊外散歩或は運動をさしたら宜からう。英國あたりでは運動するのも本當の休息でないと云うて居るやうであるが、必ずしも拘泥しなくても宜からう。午前は精神の教育を受け、午後に於て身體の教育を受ける、かういふ風習を造りたいと思ふ。

第九章　休日と其利用

第二節　暑中休暇

暑中休暇も矢張り西洋の習慣で、日本に入つて來たのだが、この暑中休暇の利用もどうも不完全である。先づ、暑中休暇には、子供を學校に遣らないと云ふだけでは何にもならぬ。何故かと云ふに、子供は學校へ行かないで家庭に居つて親の邪魔をする。學校へ行つて居る方が親は手が抜けて宜しいと云ふ。暑中休暇はつまり子供が親の邪魔をすることになつてしまふ。これは一つの缺點である。もう一つは家庭生活と云ふものは、決して規律正しいものでない、學校生活の方が遙かに正しい。殊に夏休みになると、非常に不規律に陷るから、身體を丈夫にするどころか、却て病氣を起す。生徒なども九月の學期始めになると、病氣で缺席者か多い、これでは休んだ甲斐もない譯である。

そこで昨今暑中休暇廢止論が起つて來て、學校に通はした方が宜い、學問をさせるのが惡いならば、遊戲運動だけでもさせたら宜からうと云ふ論まで出て居る。これは理由のある議論で、若し充分に利用したら必ずしもさう云ふ問題は起らない。

先づ轉地、旅行等に利用する、それには相當費用の掛ることであるが、外國の家計の豫算には必ず暑中休暇中の轉地の費用を計上してある。百弗二百弗をそれに充てると云ふ風に豫算の內に組入れてある。この位まで暑中休暇を重んずることが必要である。さうして山なり海なりへ子供を運れて行つて、空氣の新鮮な、自然の美しい所で、子供の發育を圖ると云ふことは、實に良いことである。併しこれは個人として計畫することは非常に骨が折れるから、學校或は團體が計畫することが望ましいことである。

もし又家庭に子供を置くならば、母親が充分に氣を付けて、家庭を一個の體育場にすると云ふやうな方法を考へるが宜い。例へば家に居ながら轉地したやうな氣分にする。部屋の使ひ方を變へて見たり、簞笥や鏡臺の置場を變へて見ると、新しい氣分になるものである、それから溫泉に入る代りに毎日朝から湯を立てる、湯を立てる役には男の子を使ふ、自分で水を汲み込み、又湯

を沸す。掃除も亦引受けてする。食事は女の子がそれに當ると云ふ風に、家庭の子供を適當に利用してやる。斯様に案を立てゝやれば、決して邪魔にはならない。

子供を家事家業に利用することに就ては考へなければならぬことが多い。子供は元來活動するものである。その活動が全く無用に使はれて居るのは惜しい。時にはそれが親の邪魔になる。一歩研究の歩を進めて見たならば、子供の働きが效果を齎して、家庭に多大の便宜を與へるやうなことになりはせぬか。これは米國の本で讀んだことであるが、澤山の子供が體操場で運動をして居る。するとその運動の力がダイナモを動かし、ついで機械を動かし、相當の仕事が出來ると云ふやうな機械を工夫してあつた。即ち床の上で跳ねて居れば、その力がダイナモに加はつてダイナモを動かして、遂に電流を起すのであるが、此等は子供の遊んで居る力を利用するので非常に面白い工夫だと思ふ。とにかく子供の力を利用すると、種々面白いことが出來るに相違ない。從來は只邪魔物として扱ひ、惡戯として考へて利用をしなかつたのは良くないと思ふ。

第十章　個人差と教育

實地に取扱ふ子供は常に個人である、即ち具體的の人である。普通人でもない、抽象的の人でも無い。而して具體的の人即ち個人には常に其の個人の特色と云ふものがある。其の特色を能く了解して、之を指導しなければ、教育は十分に其の效を奏するものでは無い。古語に「人を見て法を說け」とある。藥でも萬能膏の如く、一の藥で何にでも利く藥は實は毒にもあらず藥にもならないものである。苟くも藥が有效であると言ふからには、必ずその病氣に適應したものでなければならない。教育も亦それと同じであつて、必ずその人々の性質或は智能に相應しいものでなければならない。

そこで子供を教育する者は、先づ子供の個性、個人差と云ふものを能く調べて置く必要がある。

第一節　健康の程度と體育

先づ健康の程度に依つて人間を分けることが出來る、極く丈夫な者から病人に至るまで種々の階段がある。或學者の說に因つて、之を六つ位に分けて見る。最強健な人と云ふのは曾て病氣をしたことのない者、其次に強健な人といふのは普通の人よりは健康なる者、年に一二回輕い病氣する位のもの、それから健康の者、年に十日位仕事を休む程度のものである。それから薄弱の者これは暑さ寒さに非常に不愉快を感ずる人々、極薄弱の者と云ふのは氣候の變り目に必ず疾病を起す者、但し平時には差支のない者、最後に病態の者と云ふのは、常に慢性的疾患があつて氣持の良い時が少い者、斯う云ふ六階段に分けて見る。子供にも矢張此の六階段があつて、其の子供相應に取扱を違へなければならない。例へば食物にしても、或は着物にしても、其他運動をさせるにしても、健康の程度を能く見て、それに適應したものを與へると云ふことが大切である。然るに、或人は硬教育と稱して、どんな弱い者にでも驅足をさせると云つたやうな無理なことをやつて、却つて取返しのつかぬことになつてしまつた例もある。或は非常に强壯であるに拘らず、子供だと云ふ所からつひ可哀相に思はれ、これを柔弱者扱にした爲に、丈夫に育つものを薄弱にしてしまつた實例もある。斯く、健康の程度を研究して、それに相當したる取扱をして行くと云ふことが、最も必要であつて、丁度醫者の方で云へば、診斷を下した後手當を施すと同じことで、病氣の程度を考へずに、何時も同じ手當を施してはいけぬやうに、兒童も亦其の健康の程度を研究して、それに能く適合する體育法を施して行かなければならない。

第二節　氣質の種類と德育

性質、即ち氣質と云ふものを分類して種々に分ける人があるが、私は大きく分けて三つにしたい。第一は活動的の人間、第二は感情的の人間。活動的の人間と云ふのは、意思が强くて又常に何かしなければ居られないと云ふ性分である。感情的の人間と云ふのは感じが强くて、物事を觀察しても嬉しいとか悲しいとか云ふ感じが先に立つ。無頓着の人間と云

ふものは、物事に對して猥しいとも悲しいとも感じなければ、又其の物事をどう處分しようと云ふことも考へない、萬事成行に任せて置く素質である。

此三つを極めて簡單な實例で說明すると、今子供が居る。それらに向つて、「これから公園に散歩に行かう」と、父か母が誘ひ出したとする。活動的の子供は「はい行きませう」と應ずる。「行つて何をするか」と聞いても、只「行きませう、行けば面白い」と答へるに過ぎない。然るに感情的の子供であると、「行つて何が面白いの」と聞く、「何か面白いことがあるなら行つても宜い」、と云つた風に答へる。無頓着の子供であると、黙つて居る、「行かないか」と催促をすると、「行つても宜い、行かなくても宜い」と答へる。さう云ふ風に三通りあるやうに思ふ。此活動的の子供を二つに分けて、一は極く氣輕な活動的の子供、一は極く強情な活動的の子供。それから又感情的の子供を二通りに分けて、一は陽氣な感情的の子供、一は極く陰氣な感情的の子供。無頓着の子供を二通りに分けて、一は智力の働かない無頓着の子供、一は智力の働く無頓着の子供、凡そこんな風に別けることが出來る。

斯う云ふ性質は生れながらの性質であつて、なか〳〵親や教師の力で、之を變改することは困難であるが、之等に對する時の親の心得が非常に大切である。親は一體どう云ふ心持を以て、之に向はなければならないか。或親は總て自分で考へた一の型に嵌めようとする。さう云ふ結果は勿論良くないことに定まつて居る。又或親は何でも子供の儘に任かせて、どうならうと一向無干渉に之を取扱はうとする、それも亦良くない。何故良くないかと云ふと、子供の性質と云つても、必ずしも全然變化しないものでも無く、變化させないで良いものでもない。そこで我々はどう云ふことを標準として此の氣質を考へなければならないか。

元來人間と云へば活動的であるのが一番良いのか、どうもさうばかりも云へない。例へば、文學者になつては活動的の性質は其の文章を淺薄にして了ふ。落着のある、深刻な文は書けない。然らば感情家が宜いかと云へば、政治家になつて感情的であつたら仕樣がなからう。では無頓着の人間はどうかと云ふに、學者になつたならば無頓着でも宜しからうが、事業家や藝術家には禁物である。そこで或學者は斯う云つた。「大事件に遭遇しては無頓着の氣質が最も必要である。又

人と交際などしては感情的の性質が最も必要である。又事業を爲す時には活動的の人間が必要である」と。若し出來るならば、吾々は場合々々に應じて、其の三つの性質が現はれて來たら、それが一番理想的であらう。吾々が何れかの性質に偏して居ると云ふことは、人間の已むを得ないことであつて、實は缺點である。して見ると、教育の方針も其處に考を置いて行かなければならないと思ふ。

性質は直らないにしても、常に活動的ばかりでなく、友達の悲しみに對しては、矢張り悲哀の感情を起さすやうにして行かなければならぬし、家庭の困難などに遭遇しては無頓着に居るやうな性質を養成しなければならぬ。さう云ふ考を以て指導して行くのが大切である。

さて其の指導の仕方に途がある。第一に注意すべき點は、人の氣質は容易に直らないものであると云ふことを能く頭に入れて掛ることである。其次に大切なことは、其の特色を利用して、特色から入つて段々導いて行くと云ふことである。例へば本を讀むことに少しも興味がないとする。併し、其の人でも他に何か興味がある筈である。その興味をもつた事柄を捉まへて、其所から本を讀む興味を誘ひ出すと云ふ方法を採る。これは或人の實驗であるが、本を讀むことを全く嫌つて居る男の子があつた。餘り怠けてばかり居るから、或日「お前は何か好きなものはないか」と聞いた。犬ころが好きだとの返事。ではと云ふので、犬ころを與へた所、非常に大切にして居つた。或時犬ころが病氣になつたので、頻に心配して居るから、それに乘じて「犬の病氣を癒すことは此の本に書いてある、お前讀んで藥をやつたら宜からう」と云つて本を渡した。讀んで見たがもとより解らう筈がない。こゝに彼れは文字を知らなければならないと云ふことに氣がついた「どうしたら讀めるか」と聞く、「先生の教を守つて能く勉強すれば讀める」と答へた「それでは本を讀む」と言ひ出して、これから本を讀み始め、終には牧畜學に通じて、大變大きな牧場の管理者になつたと云ふ。これなどは矢張り其の本人の長所から入つて短所を矯めた遣り方で洵に巧妙を極めて居る。總じて個性を導く方法はこれで無くてはならぬと思ふ。そこで、一層巨細に入つて、活動的の子供をどう云ふ風に導いたら宜しいか、感情的の子供をどう云ふ風に導いたら宜しいか、無頓着の子供をどう云ふ風に導いたら宜しいか、是から簡單に述べて見よう。

活動的の子供は常に元氣能く活動することが其の特色であるから、それに活動を促す必要はない。處が、活動的の子供は必ず輕忽で仕損ひをすると云ふことが一の缺點である。さうでない場合には、自己の言ふことを徹して親や他人の言ふことを聞かないと云ふ缺點に陷る。そこで輕忽で物を仕損ふ者には、出來るだけ自分で自治的に物をさせることが必要である。卽ち狹くともその子供に部屋を與へ、品物の取扱にはすべて自分が任じ、自分の使用した品物は自分で始末をつけるものと了解せしむるやうな方法を講ずる。又疵のない物を與へて、或期間それを使つた後に一度調べさせる、自分の輕忽の結果が判然分つて來たら、これは自分が惡かつたと反省させるやうに仕向けるのである。

ルーソーは子供の教育法に於て「自然の制裁」と云ふことを餘に言つたことがあるが、自然の制裁と云ふのは、つまり外部から餘り彼此干渉しないで、子供自身に種々のことをさせ、自分で成功も失敗も味つてそれに依つて、反省せしむると云ふ方法であつた。總べて子供にはかう云ふ取扱方であるが、就中、最も必要なのは活動的の子供に對してであらう。

それから强情な子供を取扱ふことは、矢張り活動的の子供を取扱ふと同じ方法であるが、最初から本人の自由に任せる事柄と自由に任せない事柄とを能く選り分けて置くことが必要である。本人が我意を張り出してから、彼是叱つて見ても效力がない。「これはお前が自分で處置しても宜いこと、これはお父さんやお母さんに聞いてしなければならないこと」と、仕事に掛る前に選り分けてさせたならば、よく活動して然も責任を重んずる善い子供になる。其代り仕事の途中に種々口を出して邪魔をすることは禁物である。世話を燒くと、子供の意志を弱めるばかりでなく、益々反抗的に我意に執着する傾向を持つものである。

それから子供に對して其の强情心を柔げるものは同情心である。されば家族や他人の同情を理解せしむるやう、日頃教へておくことも大切である。卽ち本人が强情の爲に他人にどれほど迷惑を與へて居るかと云ふことを能く了解せしむる方法を常に講ずれば、自然に優しい心が出る、優しい心が出ればその强情は薄らいで來る。大きな聲で叱つたり打つたりしても强情は直るものではない。

次に、感情的の子供。快濶なる感情的の子供は最も好ましいものであつて、常にニコ〳〵して、面白い話をしたり、又話を聞きたがつたりして居る子供であるが、併しながら餘りに感情のみに傾くと云ふことは、其の結果として、次第に仕事を疎かにし、又道理を考へることに倦む。所謂常識に富ませた子供になる虞れがあるから、斯う云ふ子供に對しては出來るだけ感情を刺衝する機會を造らないで、成るべく實驗をさせる、成るべく勤勞をさせる、成るべく科學的の學問をさせることに仕向けることが大切である。それから悲觀性の感情的の子供、これは子供としてあるべき筈のものでなく、神經衰弱的のものである。さう云ふ者は健康の增進を圖ることが先づ必要である。そして常に悲しい話、困つた話を聞かせたり、又語らせたりする機會を出來るだけ減らして、專らあつさりと快活な話を聞かせるだけに止める。所謂神經質の子供と云ふのは、主に此の種類に入るのであつて、神經質であると折々强情であり、或は我儘な性質を所有するやうであるが、それは神經質の特色ではない。

無頓着の子供、無頓着は子供の本性では無い。何か身體に故障のあることを意味する。無頓着にして而して知力の乏しいのは卽ち低能兒である。隨つて身體の何處かに故障がありはしないかと氣をつけることが、先づ大切である。

併し、性質として無頓着の子供がある。卽ち健康で、知力も相當であつて無頓着の子供がある。さう云ふ子供は出來るだけ賑やかな所に連れ行つて、大勢で遊ばせることは必要である。

總べて子供の氣質を直すものは親の責務であるけれども、親よりは兄弟、兄弟よりは友達の方が、直す上の能率は高い。無頓着の子供には極く賑かな子供を配當せしむることが必要であると言つたが、併し餘り賑かな子供を配當して、その子供をして手を拱いて傍觀の態度に出でしめたのでは亦よくない。そこで親が附いて居つて、出來るだけ、無頓着者を勸めて他の子供の遊びの仲間入りをさせることが大切である。

第三節　知性と知育

頭の働き方を分けて、銳敏、遲鈍の二階級に分ける。その事は低能兒不良兒の章で述べる。こ

ムには頭の働く方向の相違を說く。卽ち物を觀察する時に於ける性質とか、或は記憶する時の性質とか、或は注意する仕方の相違とか、或は物を考へる仕方の相違とか云ふ事柄は、此處で述べる必要がある。先づ事物を觀察するに當つて、觀察した事項を其の儘覺えて居るだけの子供がある。山が高かつた、谷が深かつたと、その儘覺えて居るだけの子供がある。或は又見聞した所を分解總合して、高い所が幾つあつた、東に山がいくつ、北に谷がいくつと云つた風に了解して居る子供がある。それから事實の眞僞には餘り懸念せず、只管ら山が高くて洵に雄大であつたとか、谷が深くていかにも幽邃であつたとか、すべて感じだけに力を入れる子供がある。尙此の外に一つは事物を觀察するに當つて、何故山は高いのだらう、何故谷は深いのだらう、どうして地上には斯う高い所と深い所が出來たのだらうと、直ぐ理論ばかり考へて居る子供がある。

斯う云ふ四つの形があるものであるが、どれが宜いかと云へば、どれも皆長所があり、又短所がある。或場合には感じで行くことが宜しい、或場合には學究的に物の理論で行くことも必要である。併し子供の觀察方に斯う云ふ四つの種類があるから、誰でも餘り一方に偏しないやうに、其の特質を破壞しない程度に於て、程よく指導することが必要である。例へば感動的に物を觀察する子供があるとする。その子供には、どうしてさう云ふ風に感じたか、感じた譯を御話しなさい、又自分で感じたやうに人にも感じさして御覽なさい、たゞと勸誘して、つまり精密に事實を羅列し、分類しなければならないやうに仕向けるが善い。又何故さう云ふ感じを起したのでせうと質問を出せば、茲に學究的に其の理由を考へさせることにもなる。總べて斯う云ふ風に取扱ふことが必要である。

第十章　個人差と教育

記憶にも種々の型がある。卽ち直接記憶が非常に勝れて居る人と、間接記憶に勝れて居る人とがある。直接記憶は見たり聞いたりしたことを、直に反復することである。この直接記憶には勝れて居るが、或一定の期間を經過したことは忘却してしまふ人がある。間接記憶とは見たり聞いたりした後、暫く經つてから思ひ出す記憶をいふのである。この記憶はなか〳〵確かだが直接記憶力は鈍い人もある。記憶といへば兩方必要であつて、一方に偏しないやうに注意しなければならぬ。其の他記憶には記憶の事柄に因つて優劣の差も生ずる。卽ち名前を覺えるに上手な人、數

を覺えるに上手な人など種々の形がある。此の種の相違はどういふ原因から來るのか分らぬが、兎に角面白いものである。

次に物を覺えた觀念を調べて見ると、目で見たことを能く覺えてるものと、耳で聽いたものを能く覺えてるのと、手に觸れて見たり動かして見たりしたものをよく覺えて居るものと三通りある。これもどれが一番良いと云ふことはないが、此等に依つても人々の性質は細かい點まで違ふのであることが知れる。されば一つの事柄を能く覺えさせようと云ふには、目で見て覺える者は繪に描いて示すが宜い。耳で聽いて覺える者には話をして聞かせるが善い、手に觸れたり動かしたりして覺える人には仕事をさせ、實驗をさせて覺えさせるが宜い。其の三つの方法を併せれば確かである、誰でも覺えられる。

此の三つの方法を併用するのが善いのに、實際になると、家庭でも學校でもどちらかに偏する。見るだけに偏する、聞くだけに偏する、尤も手に觸れて見ると云ふやうなことは、特に日本の家庭に於ても學校に於ても試みて居らない。一つ試して見たら宜からう。

注意力の働きにも種々の形がある。一の事柄に深く注意を向けて行く性質の人と、同時に澤山な事柄に氣を配つて、あれも此れも洩すまじと氣をつける人とある。實は注意の作用と云ふものは此二つが入用である。或一つの事柄に深く注意を向け、次にそれを本として、それに關係ある多くの事柄にいろ〳〵氣を配ることが必要である。例へば山といふ觀念をしかと摑みつゝ、山に關する凡ゆる事項を考へて見ると云ふことが必要である。處が、人間は妙なもので、兩方を完全にやるものは少くて、山なら山の構造と云ふことばかりを考へ出して、一點二點だけを捉へて、其處に深く入つてしまふ人があるかと思ふと、淺く廣く山の地學とか山の傳說とか旅行記とか、彼是集めて樂んで居る人もある。一方に偏しては充分で無い、一方に偏しない教育を施すことが宜いのである。併し、一方の性質を破壞して、一方の性質を補ふといふ意味でないことは吳々も忘れないやうにせねばならぬ。

次に思考にも種々の型がある。一は道理を段々細く分析して見て行く型、一は道理は道理として見て、それを新しい事件に應用して行かうとする型、卽ち理論家と實際家と云つたやうな相違

がある。理論家と應用家との區別は子供の內からも能く分るものであつて、コップが壞れたとしても、一人は何故コップが壞れたのだらうと理由を考へて居る者と、一人はコップが壞れたが、どうして直さうかと處置の法を考へる者とある。併し、子供としてはどちらも必要であるから、理論家に向つては其物の理論の方を考へると同時に、それだけの理屈が分つたら、之を實際に於て役立たして見るやうにと應用の方面にも心を向けさせるのが必要である。例へばガラスが壞れたとする、なぜ壞れたかと考へると同時に、壞はれた理由が分つたら、今度は壞れないやうにするにはどうすれば宜いか、或は壞はれたガラスをどうしたら續ぎ合はせることが出來るかと云ふ風に、必ず應用の方面を考へて行くことが必要である。實際家に對しては又常に理論なしで應用を試みることのないやうに仕向けねばならぬ。

第四節　學科の嗜好

學科の嗜好と云ふことは、其の學科の出來不出來にも依る。好きこそ物の上手なれで、好きで上手になつたのもある。併し同時に下手の嗜好きもあることを忘れてはならぬ。卽ち學科の成績がよいから好きだとも言へず、又好きだから成績がよいとも限らない。この二つは必ずしも一致するものではないが、大體に於ては一致して居る。其の學科の出來不出來、或は嗜好と云ふものを分類して見ると、第一には修身とか歷史及び國語と云ふやうな學科は略ほ同じ種類のものと見えて、どれか一つよく出來るものは其の外のものも能く出來る。地理や博物は矢張り物を記憶して行く點が似て居ると見えて地理の出來る者は博物が出來るやうになつて居る。次に數學と理科とも略々同種類のものらしい。數學理科好みも共通だし、成績の良否も似通つて居る。併し、理科も實驗的に學ばせるやうになると、數學とは餘程趣を異にして來て、數學を好む子供必ずしも理科を好むとも云へなくなる。例へば女の子などは數學は好きであつても理科は嫌ひな子があり、男には理科は好きだが數學は嫌ひだ、又理科は能く出來るが、數學はよく出來ない子供が中々ある。總じて數學の力は男女によつて差がない。

圖畫と手工、これは類の似て居るものと見えて、圖畫の上手な子は大概手工が上手であり、又

手工が好きな物は圖畫が好きである。又かう云ふ子供に饒舌家は少い。只默々として、せつせと指や掌を働かせて居る。

次に、音樂である。音樂は、繪畫と共に藝術であるけれども、兩者共通の性質を有つて居ないと見えて好不好も成績の良否も似て居らない。即ち繪畫の出來る子供は、音樂が出來ると云ふ事は云へない。音樂の出來る子供が繪畫が出來るといふことも亦言へない。

次に體操である。これは又身體の大きな筋肉を使ふものであつて、どの學科とも餘り關係のないやうである。體操のよく出來る事が、音樂とも聯絡はなし、或は其の他の學科とも聯絡はないが、今の處それも無い。そこで、學科を分類すると、情操科、理論科、技能科、音樂科及び體操科とすることが出來る。其等學科の相互關係は種々學者が研究して居るけれども、未だ判明しない。例で言ふと、國語と數學、國語と地理のやうな學科は、餘程關係が深い。即ち、一方が出來れば其の外も出來る。數學と地理も亦さうである。然るに地理と圖畫、數學と圖畫、國語と圖畫などは全く聯絡の乏しい學科であつて、一方が出來れば、他方は出來ないやうである。

第五節　素質と教育及職業との關係

どう云ふ學校を選ぶべきか、どう云ふ職業を選ぶべきかと云ふ場合に、先づ我々の參考になる事柄は、即ち本人の健康である。次には本人の氣質である。其の次には本人の智能である。此等をよく研究しない者は、常にその學校に居りながらも、學校を嫌ひ、其の職業を執りながらもその職業を厭ふ、これでは生涯損をして暮してしまふものと言ふべきである。故に、學校と職業を選ぶ時には、どうしてもこの三個の標準について細査熟考する事が必要であるが、今日一般の人々は、多くは資產の有無を基礎として將來の學校を選び、資產有る者は何でも上級の學校に入れようと考へ、さうでないものは、中途で滿足して居る。職業にしても親の地位や身分を基として考へ、親の職業であつたから、子供もそれに從事すると云ふ風に依然傾いて居る。併し、財產と親の位地と云ふものが、職業や學校選擇の標準として、無論考へなければならないが、これを第

一に置くと言ふことは、どこまでも悪いと言はねばならぬ。

今、二三の實例を以て云ふならば、身體の弱い者には農業或は園藝と云ふやうな仕事を選べば宜しい。然るに普通には、身體が弱いから、學校の教員にしたらよからうとか、或は醫者にでもしたらよからうと、考へるが、それは非常な間違ひである。弱い體の人では教師となれば、充分に、兒童を導く事が出來ない。醫者になれば常に病家に接する爲に危險千萬である。故に園藝家と云つたやうな職業をとれば健康にもよく、面白く生涯が送れる。尙細かく色々な特質を基として、例を擧げて見ると、活動家は社會事業、或は政治家と云ふものを選ぶが最もよろしい。又感情家は、その感情を動かさないやうな仕事、即ち牧畜とか、農業とか云ふものが宜しい。習慣性吃音のある者、或は癲癇のある者などは高い所に登る仕事と、水中深く入る仕事に從事しては危險である。左右の聽力の違ふ者は、運轉手の樣な仕事に從事してはいけない。又自動車に乘つて、自分で運轉する事も危險である。次に色盲と云ふのがある。此の缺陷のあるものは水先案內とか、細菌學者とか、醫者とか、測量師とかにはなれない。次に鼻と咽喉を始終傷めて居る者

がある。斯う云ふ者は下をむいて仕事をする職業とか、或は埃の立つやうな仕事に從事してはならぬ。次に近眼の者は激しい運動の必要な力業の入る而て蒸氣、熱氣等を使ふ職業、或は測量、製圖と云ふやうなものに從事してはいけない。かう云つた風に、色々な特質缺陷があれば、それを調べて見た上でなければ、職業は選ばれない、職業が選ばれなければ、學校も亦選ばれない譯である。

私の幼時の友が高等小學の生徒であつた時のことである。一日先生に向つて「私は辯護士にならうと思ひます」と語つた時、其の先生は暫く考へて「貴方は、辯護士になる事をお止めなさい」と止めた事がある。其の時先生は其の理由を云はなかつたが、後で私に向つて「あの人の辯護士に成る事を止めたのはかう云ふわけだ。あの人は、利己心の强い人である。その家には、遺傳的に此の傾がある。あゝ云ふ性質の人が辯護士の職に就くと、公平に其の職務をとることは出來ない。さすれば本人の出世にもならぬし、國家の不利益にもなる、寧ろ止めさせた方がいゝと思つたから止めさせたのだ」と云はれた話を今も覺えて居るが、之は誠に適切な指導法であつた

と思ふ。公平と云ふ事を保つて行く職業に就く人が、利己的の人では悪い結果を將來するに相違ない。總べてさう云ふ風に、性質と云ふものをよく考へて職業を選擇して行くと、世の中に廢る人間は無くなつて來る。世の中に廢る人間があると云ふのは、自分に最も適した職業を選擇する事を怠つたからである。所謂犯罪もさうであつて何人も或る境遇に置けば、犯罪者になると云つてもよろしい。生れ乍ら犯罪性があると云ふやうな說は、今日では學者が認めない、かのロンブロゾーがそれを主張した當時は相當の信者もあつた。低能者等に對しては今でも之と同說を認めてよろしいが、併し、もう一層よく考へてその本人に最も適當な職業を與へて生活の安定を計り、同時に本人の缺點を表さないやうな境遇に置くやうにしたならば、犯罪と云ふものは全然なくなるわけである。廢る人間があり、悪い人間が出來ると云ふのは自己をよく了解して、自己に最も適當なる教育と職業とを選ばなかつた弊であると云つて差支へない。併しながら、これらは云ふは易く、行ふことは甚だ困難な事である。で、大概の人は、自分に不適當な職業に從事して居るのである。例へば教育者になるには極く頭腦の平均に出來た、餘り癖も無ければ特色もない人間が必要である。餘り偏した人間は、たとへ天才であつたにしても人を導くのに不適當である。然るに或特種の才能を持つて居る人が、教育者になつたとすれば、その人は必ず兒童を導くのに偏した導き方をする。又自分が才能があつても、それ程社會では認めないために、不平を起し、反抗的氣分を子供に教へ込む、その結果は知るべしである。外國殊に米國に於ては、職業紹介と云ふ事に、非常に力を入れて居るが、たゞに職業を紹介するのみならず、どんな職業を選んだが善いかと指導もする。我が國でも大坂や東京ではやり出した。この職業の指導と職業の紹介とは、共に必要だが、この指導は實は決して簡單な事ではなく、大きな事業である。この事業が實際に成功する事に依つて、初めて富の分配も平均して來るであらうし、又犯罪者も非常に減つて來るであらうと思ふ。社會主義者の考へて居るやうな、財產の共有と云ふ事は、到底行はるべきものでなく、又人間の能力に差違があり、過去の經驗に、歷史的沿革に種々な違ひがあれば、それらをすべて無視して了ふ事は到底行はるべきものではない。さう云ふ主張を斥けてしまふには、各人に適當なる教

育を與へ、適當なる職業を與へて行く、即ち、健康や氣質や能力の差異を見て、それに適當な職業と地位とを配分すると云ふ事が、理想的社會國家の組織である。プラトーの理想國の中に哲學者を國王とし、其の他頭腦の働に依つて、社會の種類と階級を分けて居るが、面白い考案で、結局其の方針で行ふべきであらう。即ちその氣質をも考へ、才能と健康とを考へ、三點から見て各人に適當なる職業と地位とを與へたならば、初めて其處に黄金世界が出來て來るであらう。社會主義者の主張の如く財産を平等に分配したところで、決して黄金世界が出來るものではなからう。

第十一章　低能兒と不良兒

低能兒と不良兒とは總稱して特殊兒童といひ、又異常兒童ともいふ。低能兒といふのは頭の働の足りないもの、不良兒といふのは氣質の良くないものである。

不良兒は、未だ實驗的に研究されて居ない。其の分類も感心出來るのは無い。然るに智能の缺陷の子供の分類即ち低能者の研究は比較的よく出來て居る。

まづ低能兒。低能兒と云ふのは、智能の低い子供と云ふのである。低いと云ふ意味を「比較的」と考へて居るものが多い。比較的に低いと云へば、ニュートンよりアインシュタインの方が低いかも知れない。さうすれば、アインシュタインも低能者となつてしまふ。近松より西鶴の方が頭の働が惡かつたかも知れない。さうすれば、西鶴も低能者になつてしまふ。それでは不都合である。そこで低能者といふのは常人凡人の平準點よりも低いと云ふのである。換言すれば缺陷又は病的狀態にあると言ふ意味にこれを使はなければならぬ。低能者にどん

な種類があるかと云ふに、一番程度の低いものが即ち重白痴である。人間に大切な生命保存の本能すら無い。最も極端な白痴といふべきである。それよりやゝ輕い白痴は、咽喉が渇いたとか、物が喰べたいと云ふ慾心はあるが、其他の働きは全く持つて居らない。さう云ふのを名付けて輕白痴と云ふ。從つて言葉は殆ど語る事が出來ない。成人した彼等の語る言葉が、十語以内に止つて居る。喰べたいとか、痛いとか云ふ位な言葉を十位知つて居るのである。輕白痴の上を痴愚と名ける。痴愚と云ふのは、頭腦の働が普通の兒童の五六歳の程度であつて、どんなに敎育しても、七歳の兒童の知力に止まるものである。その次には魯鈍である。魯鈍と云ふのは、八歳乃至十二歳位までの知力のものを指すのである。それ以上はどうしても進む事の出來ない者をいふのである。此の白痴、痴愚、魯鈍の階段を又更に細かく分ける人もあつて、結局最も知力の低い白痴から、天才と云ふやうな知能の最も優秀なる者の間には、無數の階級がある譯であるから、之を階段的に分けようとすれば分けられるのである。（第三章參考）

一、白　痴

（イ）重　白　痴　智的年齡一歳　歩行し得。
（ロ）白　　痴　同　一歳　自ら食を採り得。
（ハ）輕　白　痴　同　二歳　食物と非食とを區別し得。

二、痴　愚

（イ）痴愚の下々　同　三歳　少々遊戯をする、仕事は出來ない。
（ロ）痴愚の下　同　四歳　多少人の手傳を試みる。
（ハ）痴愚の中　同　五歳　極簡單な仕事が出來る。
（ニ）痴愚の上　同　六歳　簡易な仕事が出來る。
（ホ）痴愚の上々　同　七歳　簡單な用足が出來る。

三、魯　鈍

（イ）魯鈍の下々　同　八歳　普通の用事と簡易な仕事が出來る。
（ロ）魯鈍の下　同　九歳　知識を要さぬ簡易な仕事が出來る。

(ハ)魯鈍の中　同　十歳　普通の雜務がとれる。
(ニ)魯鈍の上　同　十一歳　相當複雜な仕事、時々錯誤がある、監督者を要する。
(ホ)魯鈍の上々　同　十二歳　監督者なくして雜務をとる、自ら畫策は出來ない、器械的に遂行する。

さて、この低能兒と云ふものが、どう云ふ原因で起つたかと云へば、生れながらの者が多い。卽ち、遺傳に依つて來るものが多い。優生學で有名なタベンポートは始め低能は必ずしも遺傳するものではない。普通の人と結婚すれば、低能者でもあたり前の人間を生む、と云つて居つたけれども、低能兒の研究で名高いガダードと云ふ人の調べた結果に依れば、決してさうではない、低能といふ性質も矢張りメンデルの法則の通りに現はれて來ると云ふ事を發表して居る。我々はガダードの說の方がよくはないかと思ふ。さう云ふ先天性的遺傳の外に、親が大酒呑であつたとか花柳病毒に犯されたとかに依つても、低能は起る。かゝる生來的原因の外に、出生後二三年の間に重い病氣をやると、低能になる。例へば腦膜炎を起すと低能になる如きである。或は又小さい時に、耳鼻咽喉の重い疾病にかゝつたと云ふ如きも低能の原因となることもある。

教育法の悪い事に依つても、低能が起るが、それは假性低能と云つて又再び良方法に依つて、直す事が出來るから、これは本當の低能とは云へない。低能の指導法はどうしたらいゝか、低能の子を持つた者は實に不幸である。卽ち一生涯非常の重荷を負はされたやうなものである。何故かと云ふに、低能は全く直らない、如何に之を指導しても直らない。依つて適當な番人を附け、或は相當な財産を附けて置くより外に仕樣がない。此點に於て、非常に物入りである。米國あたりでは、低能は隔離するに限る。さうして彼等はお人好で人ずれがして居らないから、悪い人の居らない所に置いて、能く之を指導して行きさへすれば、大概の者は自分で衣食して行く位の働きはする。

然るに煩雜な、競爭の烈しい社會に置けば、悪い人間に誤魔化され、悲劇を演ずるばかりである。隔離することは彼等一身の保護の爲めのみならず、隔離に依つて、彼等に悪いことを敎へる機會を少くする、尙此の上悪質遺傳を殘さない、といふ利益もある。故に低能者の始末は親の力

だけでは出來ない。國家が相當の機關を設けるか、或は慈善團體が相當の機關を設けて、其處に收容するのが最良方法である。併し、此の案の實現は俄に望むべからざるものとすれば、矢張り出來るだけ獨立の出來るやうな、但し餘り煩雜でない簡單な仕事を教へて、適當なる指導者の下に一の機械となつて働いて、一生を過ごさせることが必要である。この場合、低能者に相當な職業といへば、まづ農業の手傳、園藝の手傳、養雞の手傳と云ふやうなのが宜しい。さうでなく大勢で競爭をする職業に就けたり、小さい乍らも自分で獨立で物を考へて衣食して行かなければならないやうな仕事に就かせれば、元々空虛な頭を使ひ過ごしたり、或は仕損じたり、他人にだまされたりする外はないのである。

さて、低能兒と通常人との間に劣等生と云ふものがある。それは十二三歳の知力の所有者である。之はやはり低能者の取扱ひに準じて取扱ふべきである。處が所謂親馬鹿で、親は子に對しては目が眩んで仕舞ふところから、我が子を劣等兒であると思ひ定めることがむつかしい。それが大缺點である。その爲に教育の方針を誤り、職業選擇の方針を誤つて行く例が無數である。そ

れで弱い者は、病氣でなくても手當を疎略にすれば病氣が起る如く、低能兒、劣等兒は其の取扱ひ過まるから、益々惡い結果を見るのである。馬鹿は馬鹿で止むを得ない。馬鹿としておいて、さて本人の幸福を圖つてやると云ふことが大切だ。中産階級以上の所謂ブルジョアの親は出來ない子供なも出來るやうに思つて、思ひ切りが惡い。それが却つて子供の爲に災難である。昨今大學卿の問題も盛に唱へられるが、深く研究して行けば學校へ入れた所で無效であると云ふやうな劣等生までが、强ひて學校へ入りたがる爲に起るといふ場合も相當にあるやうに見受ける。これといふも日本に能力檢査、或は精神檢査と云ふ事が充分進歩して居らない所から起る弊害だと思ふ。

第十二章　訓　練

第一節　訓練の意義

身體が弱いか、丈夫であるか、頭が、鈍いか、鋭いか、此等の相違は多く先天的に來る。生まれた後の教育の力は大した效力を奏するもので無い。それに比べると、人の性質の善し惡しと云ふものは大部分其の人の育つた境遇や教育の影響を受ける。生れつきと云ふことも素より關係はあれど、大關係とまでは言はれない。そこで之を廣く社會問題として考へて見ても、犯罪者を減すは、遺傳の改良よりは、教育の改良、教育の改良よりは社會組織の改良が、先づ急務で無くてはならぬ。例のロンブロゾーが生來犯人と云ふ說を唱へ出したのは、今日では最早歷史的價値を有するだけになつて居る。さて、東洋に於ては、人の性は善か惡かと云ふ問題が、三千年の昔から色々と論議されて來た。西洋には其のまゝの論は聞かないが、所謂先天良心論として說かれて居

る。卽ち良心の起源が生來的か後得的かと云ふので、矢張り性の善惡論と似通つた論議である。併し、此等の說の如く、人性を善とも惡とも定める事は、いづれも不都合であつて、結局は善も惡も無い。善惡は本人の性質と境遇との調和不調和から來ると云つて宜いので、畢竟今の社會組織が、甚しく不自然であるから、犯罪も出る譯で、若し社會組織を改良して、人間の本性に合ふやうにすれば、犯罪は次第に減少する。これは人の天性が變つたのでは無くて、社會の組織が變つたまでである。

家庭教育に於ては殊にさう云ふ意味が明かである。子供は神の造つた貴い生命である。自然に發達する力を有つて居る。それを助けて大きく育てるのが、教育の目的であるのに、種々なる慣習、或は因襲と云ふものが、その發育を妨害して、その爲に自然の發展を止めて行く例が、非常に澤山ある。子供の此の自然の發達を助長するやうに、家庭が組立てられない事が問題でなくてはならない。併しながら子供には個人性と云ふものがある。個人性があるによつて同一の境遇にあつても、或る者は滿足して居るが、或る者には不平だらゝ〳〵で居ると云ふ相違が起る。その相違か

ら、甲はのんびり育てるだけで、訓練の目的が達せられるのに、乙は、色々の苦心を積まなければ普通の社會狀態に適合する事が出來ない。其處に教育の苦心と云ふものが殘つて行くのである。以下私の述べる所を一言で云へば、社會は普遍性を持つて居るのに、個人は習慣性と特異性とを持つて居る爲に、兩者の間に不調和が起る。これを程よく調和させ、個人の特異性を社會の普遍性に適應させるやうに、個人を導いて行く、馴らして行くと言ふのが訓練の仕事である。

第二節　訓練の方針

訓練には二つの方面がある。卽ち其の一は專ら精神の方面から訓練することで、其の二は專ら身體の方面から訓練する事である。凡そ人格と云ふものは、一個の生命卽ち生活活動であつて、決して種々分離したものを寄せ集めたモザイックではない。併し、一個の人間であるが、之を立派に育て上げるには、內面的からするのと、外面的からするのと二つの方法が入るのである。外面的からすると云ふのは、坐作進退卽ち行儀作法と運動遊戲卽ち體育とに依つて行ふもので、

俗に所謂躾け方と云ふ言葉は、この方面から名けたのである。併し、躾け方と云つても、外面の行儀作法が美はしければ、それが最後だと云ふのでなくして、動作作法をよくする事に依つて、その人間の精神をも正しくしようと云ふのである。又內面から躾けると云ふのは、所謂精神陶冶或は精神敎育と云ふやうな言葉で云ひ表はされて居るのであつて、之も世間の人の考へるやうに精神だけを陶冶する、精神だけを修養させると云ふ意ではなくして、精神から入つて、心をも體をも、つまり其の人間全體を上等に造り上げようと云ふに過ぎない。この心の方面からと身體の方面からと兩面から訓練を施した結果、其處に出來上つたものは、それは立派な人格であり、或は立派な生命である。

例の體育と云ふものは、この身體の方面から人間を造る方法であり、例の德育と云ふものは、精神の方面から人間を造るものである。然るに世間の人は、之を間違へて、精神からのみ人間は造られるもので、身體からは人間は造れないと考へて居る。從つて體育の目的は單に健康であり、或は軍事的準備であるとのみ考へて居るのは大なる誤りで、結局心と身體との關係を理解し

て居らない處から來た謬見と言はねばならない。

第三節　訓練の方法

精神から人間を造る、身體から人間を造る。どちらから先づ先きに始むべきものであるか、斯う云へば身體から先に始むべきである。身體の活動は生れて直に初まるものであるが、精神の活動は大分遲れて居る。無論極く微妙な精神の活動は生れると共に初まるけれども、人間の外部の力に依つて之を左右することは出來ない。外部の刺戟に依つて自由に左右し得るものは、先づ最初は身體である。故に身體に對して種々適當なる注意を拂ふと云ふことが、最初に現はれる訓練と言はなければならぬ。さうして精神の發育に伴つて次第に精神的の分量を殖して行くと云ふことにする。そこで訓練の最初は何であるかと云へば、規律的生活を與へると云ふことになる。元來生物は非常に規律的に働くものである。脈の數を算へても規律正しく行はれて居り、又食事でも、或は排泄でも、或は運動でも、睡眠でも、實に規律正しいもので、健康なる子供は時計と同じで

あると云つて宜しい。其規律ある生活は之を紊れれば、その人間を健康にし、又善良にし、又鋭敏にするものである。故に我々は如何にして規律ある生活を保つかに就て努力して居るのであるが、子供は自然に規律ある生活を營んで居る。既に規律的であるものを、何故に規律的に生活させようと言ふかと云ふに、玆に家庭の生活が正しい規律を破つて居ることを暗示して居る。即ち母親が乳を與れる、休ませる、睡らせる、目覺すなど云ふことを、不定時不規則にした結果として、子供は遂に不規律な生活に入つたのである。其の上子供の精神の働きの進むにつれて、種々の欲望が生ずる、其欲望に動かされて子供自らも不規律な行動をするやうになる。そんな事から親と子との協力で、不規律な習慣が次第に養はれて行くのである。そこで所謂「自然に歸れ」で、自然の此の規律正しい生活を永久に存續して行くことは、實に健康の上にも、精神修養の上にも大切なことである。故に訓練の第一歩は先づ規律的生活を爲さしめよと云ふことでなければならない。

第二に愛の心。人間の罪惡と云ふものは現存の社會組織を破壞し、他人に對して殘虐な行ひをすると云ふ二つに歸すると思ふ。そこで優しい心の持主であることは、先づ訓練の初でなければ

ならない。養老院に居るやうな老人で行く所を失つた人間、或は行路病者となつて救護所に收容された人間、斯う云ふ者はどうしてさう云ふ末路を見たかと云へば、多くは此等の人達は愛の心が足りなかつたからである。何人でも東京の養老院を訪問して、其處に居る老人をすつかり見て、何故に此等の人は此處に集つたか、彼等の共通の缺點は何であるかを掛りの人に尋ねたならば、卽坐に知れる。此等の人は非常に小意地が悪い、人の御厄介になつて生活して居りながら、それをさほど有難くも思はず、朝から晩まで喧嘩をして居る。六十にも七十にもなつて年甲斐もなく喧嘩をして居る。更に他の缺點は勇氣の缺乏である、元氣が無いことである。隨つてその喧嘩も誠に小さい喧嘩で大立廻りをするやうな勇ましい喧嘩はしない。斯う言ふ話を私はかつて聞いたことがある。此勇氣の無いと云ふことは、本人の生活力の薄弱なる證據である。これは生物として弱者である證據である。又彼等に溫い心持がないと云ふのは、人間として人間社會を造る根本的の精神が缺乏して居るのである。勇氣の缺乏と云ふことは生物としての弱者であるから、其の原因は主として先天的のものだらうと思ふが、溫い心持の缺乏は主に家庭教育の缺陷が源因を爲して居るに相違ない。

斯う云ふ點から考へて、子供を躾ける際には、同情ある子供、親にも兄弟にも他人にも親切氣のある優しい子供、此の心持だけはどうしても植つける考で教育をして行かなければならない。然らば如何にして子供の心を親切にするか、と斯う問はれるならば、所謂「愛は愛を生む」と云ふ諺が教へて居る如く、結局優しく育てる、常に同情を以て育てると云ふ外は無いのである。優しく育てると云ふことが子供を優しくする所以である。この一事が優しい親切なる人間にする唯一の理由でなければならない。

一般的に言ふと、都會の親は子供を親切に取扱ふが、田舍殊に生活にみじめな田舍の親は非常に子供を虐待する、時には都會の人の犬猫を取扱ふやうな態度のものさへある。これは私が屢々見聞して居る所であるが、それが爲に田舍の子供には同情心の缺乏して居るものが多い。ちやうど孤獨の生活をして居ると思はれるやうな、人間味を知らないやうな者が多い。彼等は無智なるが故に、罪惡を知らないから、時には素朴であるなどと稱ばれることもあ

だ見當違ひの評であつて、寧ろ同情心のない痴鈍の人間と云つべき場合が多い。都會に於ては貧民であつても矢張り見樣見眞似で、比較的子供を丁寧に取扱ふけれども、衣食に窮する程度の貧民になると折々虐待することもある。故に、貧民の子供には同情、優しみと云ふものが少い。都會の人は人が惡いと云はれるのは、段々生活難の結果、種々惡智惠が發達して來たものを指すのであつて、其の他の人々は優しい心を持つて居るやうに思ふ。

それは兎も角、家庭に於て子供を親切に取扱ふ、卽ち愛を以つて育てる最初の人は母親でなければならない。次には父、次には兄弟。これは前にも述べた如く、母は愛し父は叱るものと云ふやうな說は間違ひであつて、若し愛ばかりあつて少しも叱る所がなければ、その溺愛は愛である。又叱つてのみ居つて愛がなければ、その叱りは無力のもので、共に敎育的の價値を有たない。要するに、子供を敎育する者は愛と嚴と二つながら所持して子供に臨まなければならない。

第四節　良習慣

吾々は朝から晩まで變つたことを考へて居る。あゝも仕たい、斯も仕たいと種々と考へて居るけれども、たゞ考へて居ると云ふので、我々の朝から晩までの仕事が、如何に常と同一であるかを示して居る。或人は人間は結局習慣の襤りだ（アリストートル）と云つた。如何にも其の通り、人間の一擧一動多くは其の者の習慣である。其の習慣をお互に見樣見眞似で模ねて行くのである。故に良い習慣を造ると云ふことは、訓練に於て最も大切なことである。品性と云ふことを吾々は尊ぶ。併し分析して考へて見れば、品性とは畢竟善良な習慣と云ふに外ならない、善良な習慣が卽ち品性である。習慣が單に手足に付いたのみならず心にも付いた、さうして心と體とが一體となつて所謂言行一致して良習慣を有つて居る人が卽ち品性の整つたものと言はれるのである。

そこで習慣を養成するに就て、先づ第一に注意すべきは、その習慣が良い習慣でなければならないと言ふことである。其の模範は言ふまでも無く、親が之を示すものと言はなければならぬ。子供の習慣が良いか惡いかは、結局親の習慣が良いか惡いかと云ふことになる。これが子供は鏡

で、家庭を反映すると言はれる所以である。子供の言葉から一擧一動きで事細かに調べて見ると、皆親の眞似をして居るものである。例へば子供が馬鹿阿呆と云ふのを聞いて、どうして斯様な下等の言葉を使ふだらうと思ふ親もあるが、段々反省して見ると、それは自分が平素子供や女中などを叱つた際に使つて居つた言葉であることに思ひ當ることがある。或は又行儀の悪いのを見て大いに憤慨する親があるけれども、能く調べて見ると、其の行儀は日頃父親か母親かが始終繰返して居ることであることに氣付く。或は又荒つぽく物を取扱ふこと、或は輕卒しい擧動、どうして此の子はこんな眞似をするだらうと賞める親があるが、結局は自分から出て居ることで解決することが多い。

一の興味ある例を擧げて見ると、或人が親子五六人で東京に生活して居た、然るに良人が地方に轉勤した爲に、家内と子供とを東京に殘さねばならなかつた。良人が留守になると、一番上の子供は母親と議論を始めたが、終ひには母親に物を投け付けた、それがかうじて母親を打つたり蹴たりした。母親は驚いて、どうしてこんな酷い子になつたらうと云ふので打電して父親を呼寄せた。そこで種々研究して見ても能く分らない。近頃學校が難かしくなつて、本人の成績が餘り良くないので、神經衰弱の氣味になつたのだと斯う解釋した。けれども、尙一層調べて見たら確に昨今神經衰弱の初期になつて居ることは事實であるが、併し、それだけでは斯ういふ親不孝はするものではない。結局はその親不孝といふも父親の眞似をして居るのであることが感知された。之を悟つた父親は爾來大いに後悔してゐる。實際其の父親は日頃は母親否女といふものを輕侮してゐる。女などは次の間で下女と共に飯を食ふものだ、湯にも最後に入るものだ、澤庵の尻尾位食つて居れば澤山なものだと云ふやうな仕打をして居た。それを吾々は冗談位に聞いて居つたのだが、今回子供の擧動を見て、親が日常言つたことを繰返して居るのだと知つた。斯ういふ空氣に依つて養はれたのが習慣となつた子供は、稍々神經衰弱の兆候を呈するに隨つて、尙に述べたやうな酷い行ひをしたのである。此等は全く親の惡習慣を子供がその儘眞似て居るので、罪は子供になくて却つて親にあつた譯である。」

第五節　賞め方と叱り方

子供が良い事をした時は賞めるが善い、又悪い事をした時は無論叱らなければならない。併し賞めることも叱ることも餘り幾度か繰返せば、全くその力を失つてしまふ。叱ることも亦幾度か繰返せば其の效力を失つてしまふ。賞めることと叱ることとは出來るだけ數を減らすが善い。子供は一々賞めなければ良いことをしないと云ふものではない。又子供が悦んでして居る事柄は、能く考へればそんなに惡いことではない。それを親が小言を言つたからとて止めるものではない。

そこで、子供を賞めようと思ふ時には、明かに子供が努力した形迹のある場合に限るべきである。努力した形迹の無いのに、それを無暗に賞めるのは褒めた甲斐がない。努力した形迹がどうして分るかと言へば、多くは兄弟があつて、一方が良いことをして、一方が惡いことをして居る場合に知れる。或は前に惡い事をしたが、今度は良い事をして居る場合に知れる。いづれは努力の結果であると云ふことが分る。それに對しては充分賞與をやるが宜しい。

又惡いことを叱る場合には、間違へて惡いことをしたとか、或は騎虎の勢ひで惡いことをした場合は責めるべきでない。意地惡く惡意を以てした場合のみを叱るが宜い。惡意の伴はないものに向つて小言を云ふのは、却て本人に「俺は惡人だなあ」と思はせるだけで、利益がない。

それから尙叱ることに就て心得て置かねばならぬ事柄は、叱つたらそれだけの効力あるやうにと云ふことを考へて、效力のないことは初めから言はない方が宜しい。親は始終小言を言ふ、此方へ來てはいけない、彼方へ行きなさい、と五遍も十遍も繰返して居る。殊に母親にさう云ふ弊がある。斯う云ふことは叱つても何も效がない。效の無いのに叱つて居やるならば、只叱る親の威嚴を損ふ譯で、止めた方が宜しい。

尙ほ賞めることや叱るには各々度合があつて、其の程度を考へなければならぬ。賞め過ぎてもいかず叱り過ぎてもいけない。尙注意すべきことは、常に一定の方針があつてしなければならない。昨日賞めて置いて今日叱るやうなことではいけない。御飯をこぼしていけないと云ふならば始終言はなければならぬ。或時には面白がつて笑つて濟ませ、或時には本氣になつて叱り付けた

りするのは、親の我儘から來たものであるから、さう云ふ褒貶は特に注意せねばならぬ。

次に賞めるにも叱るにも家の者が揃つて居なければならぬ。親が賞めて兄弟がけなしたり、祖父母が賞めて父母が叱つたりすることが折々ある。さう云ふのは全然目上の威嚴を落してしまふ。例へば庭で惡戲をすると漬物が汚れる、或は庭が惡くなると云つて叱る、父親は元氣があつて面白い、それでなくては駄目だと賞める。それでは子供が一番えらくなつて、皆の言ふことを自分が判斷してやると云ふことになつて了つて、位地が全く轉倒してしまふ譯である。

それから喧嘩のやうな叱り方をする親がある。さう云ふ場合は親自らが全く落着を失つて居るので、叱つて却て害になる。それでは子供の心に深く入つて子供に呑込ませることが出來ないのである。此等は餘程注意しなければならない、殊に若い親ほど此の缺點を有つて居る。

第十三章　子供の惡癖

子供に共通な惡習慣とは何であるか、惡癖とは何々であるか、これについて學者の研究はまだ十分では無い。姑く家庭の母親の訴へる所、學校の教師の見る所などに依つて考へて見るに、家庭に於ては、先づ擧ぐべきは、我儘である、強情である、兄弟喧嘩である、食物をねだる、輕卒かしい、用事を嫌ふ、などである。學校では、不注意、輕卒かしい、狡猾い、自分の用事を他人にさせる、喧嘩をする、盜みをする、學校の規則を破る、斯う云ふやうなものが主な問題になつて居る。

併し、これらを分類して矢張り三つになるやうに思ふ。第一は人間の利己主義から出る惡癖、我儘であるとか、高慢であるとか、強情であるとか、不規律であるとか、貪慾であるとか、人を虐待するとか、此等は何れも利己主義から來る弊である。第二は勇氣の不足から來る惡癖である、即ち内氣であるとか不精であるとか、嫉妬心があるとかと云ふことである。第三は人間の頭の働

きの鈍い所から來る惡癖である。怠けて居るとか、盜癖してゐるとか、粗忽をするとか、剽輕者であるとか云ふものである。

第一の惡癖は活動的の子供に起り易いものであり。第二の惡癖は多感性の兒童に起り易いものであり、第三の惡癖は無頓着の兒童に起り易いものである。此等の惡癖は一々之を研究して、どう云ふ風にして矯すべきかと云ふことを、詳細に述べる必要があるのであるが、本書の如き、大體論を述べる場合はそれを盡すことが出來ない。そこでこれは他日に讓るが、親としては、常に此の惡癖はどこから來たものであるかと考へ、次に此の惡癖を直すべき方法を工夫すべきである。病氣でいふと、原因治療と對症治療と二通りある如く、矢張り原因矯正を主とし、然る後にその惡癖を矯正する對症療法に向ふべきである。

一例として或る人が盜癖のある生徒數人を矯正した實例を述べて參考に供しよう。盜癖のある子供は一方から言ふと遺傳的と言はれて居るが、併し極言すれば何人も多少は盜癖があると云つても宜いから、多くは習慣性のものと思ふ。故に子供に對して此の子供だけ特別に惡い子供であると考へると、却つて矯正することは出來ない、そこで先づ盜癖の原因を調べなければならぬ。其の生徒の實例は偶然にも原因が寧ろ反抗的であつた。言換へれば其の子が尋常科五年生の時に伯父から三圓ばかりの金を貰つた。かつてこんな大金を貰つたことの無い彼の兒は大變に喜んで、それを肌身離さず學校まで待つて行つたが、體操の時にふとそれを机の上に載せておいて運動場に出てしまつた。歸つて來て見ると無い。その時の落膽は非常なものであつた。そこで彼の兒は何だか大損害を受けたやうに感じて、此の損害はどうかして償はなければならぬやうな考が浮んださうである。それと同時に他人はどんな風にして、私のお金を取つたのであらうと云ふ好奇心も手傳つたと見えて、或時友達が忘れて置いた財布を盜んだ。友達はお金が無くなつたと云つて大騷ぎをしたけれども、遂に發見されないでしまつた。その時彼の兒は盜んでも分らないものだ。私も斯うして取られたのだ、私はその損害を償つたがまだ少し足りない、もう一二回盜つて見よう、と、斯う思つたと云ふのである。斯の如くして數回繰返して行くに隨つて、段々樂になり、興味が出て來て、遂にそれが病みつきになつて、女學校の四年の時に其の教師に發見され

たのである。その時彼の兒は過去の罪惡は勿論自白した。そこで教師は深く將來を誡めたが、其の教訓は斯うであつた。「貴女のしたことは非常に宜しくないことである。自分に物が足りないから取る氣になつたのだらう。今後もお金が無くなれば、又取る氣が出るかも知れない。さて一度取る氣が出て取つてしまつては、もう一生なほる折が無い。又折角今日自白して罪を悔いた甲斐がない。さうかと云つて貴女は子供の時からの欲しいと云ふ心が止まないかも知れない、その時は私まで頼みにお出でなさい。斯う云ふ物が買ひたいが買へない、どうか先生買つて下さいと云つて來るが宜しい。それが貴女に必要なものであれば、私がどうにでもして買つて上ける」と懇々諭して遣つた。此の子供は大した物を盗んだ譯ではないが、最後に時計を盗んだ時に發見されたのだ。それまでは本とか筆とかをチヨイ〳〵盗んだのである。そこで教師は何か欲しいことも あらう、先づ少々お金を遣るから、之を持つておいで、今後も亦欲しければ又貰ひにお出なさいと云つて、五十錢の銀貨を與へた。さうして本人が要求して來たら其の要求に應ずる積りであるが、餘り多くなつては困るから、保證人を呼んで、若し本人が金を澤山要求しても出して下さい。私が本人に呉れたことにするからと約束した。併し、それ以來金を呉れと云ふことを言はない。教師は折々呼んで、何か欲しい物はないか、お金は要らないかと聞いても、何時でも呉れとは言はない、さうしてもう決して致しませぬと云つて、其後卒業まで何も要求しなかつた。卒業後或職務に從事して居るから、本人の生活狀態は良くなつて居るし、其處へ行つても惡いことをしないことが明瞭になつて居る。結局教師の教訓法が宜しきを得たので多年の惡癖が直つたものと見て宜しい。此の治療法は原因療法であつて、精神分析の力に依つて原因が探求されたのである。さう云ふ例は三つばかりあるさうだが、何れも結果は良いやうである。これは別に何の法に依つた譯でなく、其の人の獨創に過ぎない。こんな事は少し考へれば考へ付くことであるから、親たるものは各自の子供の惡癖に對してかう云ふ風に調べて原因を知り、根本治療を加ふべきである。

惡癖矯正法十案

第十三章　子供の惡癖

一、虚言

諺に「虚言は泥棒の始り」とあるが、子供はよく虚言をつく。わけて日本の子供は虚言をついて平氣で居る。此の惡癖は是非矯めねばならぬ。併し、子供の虚言といふのは、大人の虚言とは心理的に見て大分違ふ。子供の虚言をいふのは第一に、認識の不正確から來るのである、虚言では無くて間違である。第二に、想像の强いところから來る。一尺の蛇を見ても五尺も八尺も一丈もあつたやうに、後になつて憶へば憶ふほど大きく思ひなされるのである。そこで正眞の虚言といふのは、何か爲にするところがあつて、虚僞と知りつゝそれを言ふのをいふのである。大人の虚言は多くそれである。甚だ惡むべきである。

虚言を矯めるには、虚言の性質をよく知つての上にすべきである。第一、第二の虚言ならば、先づだまされないやうにし、靜かに事實の相違を指摘すべきである。第三の性の惡い虚言であつたら、充分に叱つて以後決して虚言をいはないやうに嚴命すべきである。それにつけても、親達や大人達がもう少し虚言をいはないやうにすることは、根治法の第一である。家庭によつては、態々虚言をいふことを教へて居るものがある。「聞かれたら知らないといふのですよ」、「お食べなさいと言はれても、夙うに戴いて參りましたと言ふのですよ」こんな會話は大概の家庭では毎日繰返しして居りはしないか。

二、我儘

人間は元來我儘なものであるが、自然と社會とは此の人間の我儘を許してくれない。そこで成長して經驗を重ねるに從つて、此の我儘が薄らぐのである。ところが、家庭が裕福であるとか、祖父母があり、使用人があつて、人手が充分であるとかすると、子供の可愛さの餘り、子供の要求は何んでも容れるやうになるところから、子供は遂に節制といふことを覺えないで了ふ。斯くて立派な我儘者が出來るのである。併し、一旦我儘にして了ふと、後で氣がついて、俄かに教育方針を變へても、もう遲い。却つて子供の反抗心を喚つてねぢけた性質にして了ふ。原因をつくらないことも大切だが、矯正にも心を用ひねばならぬ。矯正法としては克己節制の强い子供と遊ばせることである。親自ら克己節制の實例を示すことである。幼稚園へ入園させるなども一案

であらう。

尙一つ注意すべきは、子供の我儘なものに限つて、身體の弱いことである。これは弱いから可愛さが餘つて我儘にしたのでもあるが、我儘にして置くから、身體が丈夫にならないのでもある。これらは常に遊戲をさせて、一方には身體を丈夫にし、他方には克己を學ばせるのである。とにかく急には出來ない。

三、强情

自分の正しいと思ふ所を執つて動かない、これも一種の强情である。正否に關らず負けず嫌ひだから言出したが最後、どこまでも言ひ張る、これも一種の强情である。何でも他人と反對したい、他人が白といへば黒、黒といへば白といふ、これも一種の强情である。

第一の場合はまづ善い。但し、自分の正しいと思ふことが必ずしも正しいかどうかを反省させるやうに指導することを忘れてはならぬ。强情の子で、將來有爲の材になつたとすれば、此の種の子供である。第二の場合は少々悪い、我儘なのである、自己主義なのである。日頃子供の要求に對して親は一應は拒絶したが、飽くまで要求するので、到頭拒絶し切れず負けて其の要求を容れたのが病みつきとなつたのである。忙しく働いて居る親と氣の弱い親とはよく此の失敗を演ずるものである。第三の場合はすつかりこぢらかしたのである。他人の意志を尊敬するといふ良習慣をつけることが何よりの矯正法である。家庭會議など、最も有效だと思ふ。其の際彼に對しては充分の同情を示しつゝ公平の態度を以つてこれに望むのである。彼をして自分ばかりを冷淡に取扱ふと思はせたら、其の矯正法は失敗したものと思はねばならぬ。親切で忍耐强い友達と遊ばせるなども良法であるが、充分に監督しつゝでなければならない。

四、亂暴

朝起きても碌々顏も洗はない、御飯時に手も洗はないその癖手握みでむしやつく。これも亂暴の一つである。成人すると藏衣破帽で大道を濶歩する底の人間となるに相違ない。朝起きて辭儀するではなし、來客があつても挨拶するではなし、庭をも室內と心得て素裸足で歩く、そして其のまゝ拭きも洗ひもしないで、座敷へ上がる。これも亂暴の一つである。成人すると放歌高吟、

亂痴氣騒ぎをする底の人物となるだらう。弱いものと見て石を投げる惡口をいふ、落書きはする、放尿はする、喧嘩はする、打壞しはする。これも亂暴の一種である。成人すると、所謂主義者になつて、精神は了解しないで、直接行動だけを引受ける人間となるに相違ない。要するに、無作法に始まつて傍若無人に行くのが此の惡癖の特色である。

矯正法としては、規律的生活と行儀作法を仕込むことである。又自儘は通らないもの、他人の人格に意徹しなくてはならぬと熟々悟らせるが第一だが、それには年上の子供と遊ばせるが善い。弱虫や弟妹や年下の子供と遊ばせておくと此の癖は直らない。親が旅行などに連れて行くのも中々利き目がある。

五、內氣（泣虫）

聲は低くて小さい、言葉は不明瞭で、はき〳〵しない。表現は子供らしく快活でない。動作は不活潑で、遊戲などを好まない、凡そ此等が內氣の徵候とも見るべきであらう。內氣にも種々の階段がある。をとなしい、子供らしくない位のところから、とかく沈み勝ちで、ともすれば無言で過ごし、何か尋ねればめそ〳〵泣き出すと言ふところまである。いづれにも共通な一點は他人に遇ふことを嫌ふことである。人見知りする子の多くは內氣の子である。

內氣になつた原因の主なるものは身體の弱いことである。病氣の子供は多く內氣である。子供は元來快活なのを本體とするのに、內氣とは例外といふべきだ。そこに身體の健康で無い證據がある。更に他の原因は親兄弟などの內氣なことである。これが習性となると、生來元氣ものでも遂には內氣になつた例は決して少くない。も一つの原因は虐待されることである。着物は勿論、食物さへ碌々宛てがはれず、寄ると觸ると小言をいはれ、箸の上げ下しにも怒鳴られると、子供は遂に內氣になつて了ふ。幼兒虐待の例に擧げられたやうな子供に多く內氣である。

矯正法として第一は體の健康を圖ることで、第二は一家が快活になること、第三は親切に取扱ふことである。

六、過敏

神經過敏と聞くと、銳敏らしく思はれるが、實驗的に研究して見ると、大變な相違である。過

敏は知覺も鈍く、記憶も悪い、鋭敏は知覺も鋭く、記憶も確かである。そこで神經過敏といふのは、感動性の異常なことをいふと云ふことが知れる。常人が何とも思はないことを、或は嬉しく或は恐ろしく感ずる度合が甚だ強い。さて又常人でも珍現奇象に遇へば一寸は驚異するが、やがて心は平靜に復するものである。然るに過敏のものは驚異を過ぎて驚愕となり、激昂した心持は何時までも收まらない。此等が過敏の特色であらう。

神經過敏に二種ある。其の一つは多感多情で、事毎に感慨が深いが、さて時過ぎれば忘れて了ふのである。其の二は感傷的であつて、それからそれと悲觀的に物を見て行き、常に過去の美しさと現在の醜さとを比べて悲觀にくれるのである。前者を神經質といへば、後者をヒステリックといふべきである。

矯正法は健康の回復が第一である。其の次は周圍の人々の態度の一變が必要である。周圍の人々の態度一變は言ふべくして行はれ難い。そこで必要なのは轉地療養である。轉家療法である。全く異なつた家族の中に入れ、親切に同情深く取扱ふことである。これ以上の療法は神經病科の醫師に相談するに限る。

七、粗忽

粗忽に二通りある。時々ぼかつとして粗忽をするものと、終始そはそはとして粗忽をするものである。いづれも注意力が行屆かないのである。前者は氣を配ることが出來ないのである。後者は一事に氣を集注することが出來ないのである。一事に氣を向けると同時に、絶えず彼是と氣を配るのが、注意のよく働く人であるのである。粗忽の原因の一つは生來的である。即ち頭腦が痴鈍なのである。低能者は多く粗忽者である。原因の第二は神經の疾患である、神經衰弱でもヒステリーでも第一種の粗忽の徴候を呈するものである。

矯正法としては、先づ遺傳の改良だが、これは俄かに注文する譯にもならぬ。次には疾患の治療である。其の他は周圍の人々の擧動言語の沈着なることである。仕事に油斷の無いことである。すべて緊張した態度で仕事に從事することを見習はせるより外は無いのである。

八、無精

無精に三通りある。學問の勉強はするが、學用品の始末もしなければ、室の掃除も靴の手入も少しもしない、甚だ無精者がある。これに反して机内はよく整頓する、室内の掃除はよくする、着物の整理はよくするが、學問の勉強は一向しない、催促されて嫌々で少々する。間もなくとんほ釣りの友達でも來れば直ぐ出掛けて了ふ。但しとんぼ釣りや蟬とりは名人で入らせられると言ふのである。それから、勤勞も勉學もどちらも嫌ひで、徹底的無精者がある。これが即ち怠惰者と言ふのであらう。

第一種と第二種とは、眞の無精者では無い。習慣のつけ方が惡かつたつである。親の指導が善くなかつたのである。仕向け方如何に因つて矯正は何でも無い。何でも興味が出るやうに仕向ければ善いのである。併し、それにしても單に懸賞といふやうなことで刺戟するだけではいかない。矢張り人に負けないため、親や先生を喜ばせるため、友達に迷惑をかけない爲といふやうな心持の下に奬勵したいと思ふ。

第三種は多く低能兒であるから、矯正はむつかしい。尤も教育の惡いので、怠惰になることも

ある。即ち家庭生活に規律が無く、放慢であつて誰も指圖し命令するものが無い。そして學校へ行けばこれが惡い、あれが出來ないと叱られ通しである。歸りには惡い友達と買喰ひでもして道々惡戲をして歩いて來る。時々は活動寫眞でも見に行つて、子供に似合はぬ話を興がる。凡そ此等の惡い影響が積り積つて怠惰者となることもある。其の矯正法に至つては說明までも無いことである。

九、殘酷

人間には虐待本能といふものがある。下等動物を見さへすれば、それが害をなさうと益をなさうとそんなことは考へずに、いきなり打つたり、たゝいたり、踏みにじつたりする。これは人類がまだ進歩しなかつた頃一身を保護する必要上、發生したもので、其の昔にあつては必要であつたらうが、今日になつては、もう必要は無い。併し、本能だから、どの子供も此の性質を持つて居る。これは芽生えの中に抑へて其の發育を止めて了はねばならぬ。それを放置すると、遂にはトンボを捉へてお尻を切つて紙捻を挿して飛ばせたり、蛙の肛門に管を挿入し、息を吹き入れて

腹の膨れるのを見て喝采したり、生きた蛇の口に火薬を仕込んで破裂するのを見て痛快がつたも、鶏の羽毛に火を付けて苦んで跳ね廻るのを見て掌を打つて喜んだりするやうになる。西洋では「人殺しは豚殺しがする」といつて居る。殘酷な習慣が遂に其の者の本性となつて、殺人のやうな恐ろしいことをするのである。注意せねばならぬ。

動物保護は子供の教育上から見ても必要だが、更に牧畜の發達の上から見ても必要である。日本人は氣が荒くて動物を愛護しないから、牧畜業が發達しない。牛や馬や犬まで氣が荒くて使ひ難い。此の點は餘程考へねばならぬと思ふ。

子供が殘酷になり冷酷になるのは、一つは動物虐待本能を抑へないで置いた故でもあるが、更に他の有力な原因は其の子供を虐待するからである。ちよつとした過失にも打擲を加へたり、少々の惡戯にも手足を荒縄で樹に縛り付ける様な仕置をするからである。子供に體罰は無用とて言へないが、體罰を加へる程の惡事は年にいくつと言ふほどしかない。三百六十五日二六時中あると心得たら、大間違であらう。

一〇、嫉妬

殘酷が男の子の陷り易き惡德だとすれば、嫉妬は女の子の陷り易き惡德である。無論女にも冷酷なのがあり、男にも嫉妬するものがあるが、大體から言へば、前述の如くであらう。

そも〳〵嫉妬といふものは、美望の情のこぢれたものである。妹は掃除をして母様から褒められた。然し自分は何もしない、しないから褒められない。褒められないのが當然ではあるが、矢張褒められたい。そこで妹の褒められて居るのが口惜しい。こゝで自分が何か善いことをして褒められようと考へる程のものでもあれば、嫉妬などは起りはしない。して見ると、結局嫉妬は利己主義に外ならぬ。

嫉妬は利己主義の下地に生えるものであるが、此の惡德を培養するのは、親の態度と親の模範とである。親殊に母親が氣まぐれもので、褒める時には美しくも無いことをほく〳〵喜んで褒めそやすかと思ふと惡くも無いことをぷり〳〵怒つて叱り出す。それから兄弟姉妹を公平に取扱はない。自分の好きな子は目にも入れたいほど可愛がるが、他の子は他人の子か、時には敵のやう

に憎む。この氣まぐれと不公平との態度は、子供に悪い感化を與へる。

さて又親殊に母親の嫉妬を起すことは子供には此上も無い善い手本となるものである。隣の奥様が美しい着物をつけて出かけると、忙しい用事をもつちのけにして覗見に出る。そして曰くだ。「あの奥様はあんな御面相で、おまけにちんちくりんと來て居る、扮装ばかり派手にしたつて少しも引立ちはしやしない。あれで御自慢だからあきれて了ふ。そして反り返つて威張り散らすから嫌になる。私だつて世が世なら　あんな人に馬鹿にされて居やしない、えゝ口惜しい。」斯う言つた様なことを毎日聞かされて居ては、娘たるもの嫉妬家にならざるを得んやである。

總じて幼稚なものは人生の各方面を見て、自分の行くべき道を悟ることがむつかしい。此の悟を開かせることは嫉妬を矯める最上の策といはねばならぬ。

附記　惡癖矯正の際の親の態度

惡癖の數はこれでは盡きて居らないが、一々擧げて原因を考へ矯正法を說いては際限が無いから、この位で一先づ打切ることとするが、最後に一言附記したいことは、矯正の際に於ける親の態度についてである。我が愛兒が或る惡癖に陷つて居るのを知つた時、「親はこんなに氣をつけて居るのに」と遣瀨ない心に、先き立つものは涙であらうが、それでは矯正も覺束無い。この際、無くて七癖、あつて四十八癖、誰か惡癖の無いものがあらう。出來たものは仕樣がない、改める外は無いと勇氣を振ひ起すことが必要だ。次に、愈々矯正に着手しても氣を長くして、徐々と改善の時期を待つべきである。何しろ二年三年かゝつて出來た習慣である、一日や二日に直つたならば、それこそ却つて不思議である。世の中に奇蹟は無い。只人間の不斷の努力が奇蹟を作り出すのみである。

次に、深く自己を反省することである。大人の仕打を調べて見ることである。惡癖の原因が折々親の行爲にある。原因を殘して置いては、いつまでたつても矯正は捗取るもので無い。

最後に、惡癖を矯めるのは、本人の爲だ、社會の爲だ、君國の爲だ、神佛の爲だと呑込ませなくてはならぬ。此の親にすむか、親に對して申譯があるかなどと自己主義の立場で說法しては決して利き目のあるものでは無い。神佛を信ずる人々の訓誡の割合に效を奏するのを見て、此の邊

の道理は悟られるだらうと思ふ。

As the field, as the crops;
as the father, so the sons.

畠を見て其の収穫を知り、
親を見て其の子を知る。

第十四章　小學入學當時の家庭教育

學校教育は、家庭教育の延長である。家庭で出来ない所を學校でして遣る。斯様な譯だから、家庭と學校とは違ふものと思つたら、それは非常な間違である。先づ此の間違を一番先きに去らなければならない。學校と家庭とは同じである。隨つて學校では腰を掛けて居るのに、家庭では坐つて居る、家庭では時々おやつを喰べるのに、學校では喰べない。此等は矛盾して居るから調和しなければならない。若し腰をかけて居る方が宜いならば、家庭でも腰を掛ける、家庭でおやつを遣るが善いなら、學校でもおやつを遣るべしである。米國では十一時になると、子供は手を洗つて綺麗なテーブルに集つて、牛乳とお菓子とを戴く。まづずらりと並んで待つて居る。先生が來てお辭儀をして、時には祈りを上げて、それから皆喰べる。一休みの後更に一時間ほど勉強する。これは大變好いことだと思ふ。とにかく家庭と學校との生活が餘りに違つて居るのは教育の本旨には適はないのである。

第十四章　小學入學當時の家庭教育

處が、日本では學校と家庭との樣子が大變違ふから、子供の入學當時は精神的に非常の打擊を受ける、又身體にも疲勞を感ずるのである。私は六人の子供を學校へ遣て居る。小學校から中學校、高等學校へ入れて居る。小學校へ入つた當座は、いづれも家に歸つて來てぐずつて居る、怒つて居る。御飯を喰べる時も、寢る時も怒る、夜は魘えることさへある。體重を測つて見ると、痩せて來る。夜中に魘えたりするのは神經衰弱を起したのである。是は學校生活と家庭生活との相違が思ひの外大きいから來るのである。そこで或論者は學校と家庭との間に幼稚園を設ける必要があると叫ぶ。今日までは幼稚園をさう云ふ意味には考へて居なかつたが、かう云ふ意味から國民教育の一部分として何人をも一度は幼稚園に入れた上で小學校に入學させることにしたいと論じて居る。議論としては面白いが、俄かに實行し得べきものとも思へないから、寧ろ學校と家庭との差を餘り大きくないやうに工夫したい。即ち學校と家庭と兩方で歩み寄つて此問題を解決して行くことが好いことと思ふのである。

然らばどう云ふ風にしたら宜いか、先づ體の方から考へて、通學距離の近いものは差支ないが

遠方から通ふ者は大變草臥れる。どうしてももう少し通學を樂にしてやることを考へなければならぬ。といつて、電車で通つたりすることは止めなければならぬ。日本の小學校では電車で通つて居る者もあるが、米國では電車で通ふ生徒などはまづ無い。若し場末に學校があると、自動車を以て送り迎ひをしてやつて居る。

さて四月に學校に入るならば、一月頃から家庭と學校の間を往復させて、學校に行く時分に疲れないやうに足馴らしをさせる。是は何でもないやうであるが、非常に大切なことである。又學校へ行くご自分の事は自分でしなければならぬ。處が、今まで一切を親にして貰つて居た子供は非常に驚いてしまふ。そこで學校に入る少し前から、自分で自分のことを始末する練習をさせる。是は何でもないやうで大變難かしい。即ち帽子を取る掛ける、着物を着る脫ぐ、靴を穿く脫ぐと云ふ練習、是は少し手間をかけてすれば子供でも出來ぬことはない。學校で先生が皆さん是から庭へ出るのですよと云ふと、少し遲い子供はまだ靴も穿けない。花子さんどうしたのと云はれる、眞ツ赤な顏をする、涙を流して居る。さう云ふことが毎日二三回あれば大概の子供は神經

衰弱になる。であるから、靴の脫ぎ穿きなども、成るべく早く出來るやうに練習させることが必要である。

一例を文字のことで言ふ。私の子供が學校に居つた時分、綴方の際に「富士山が向の方に見えます」と書くのを「富士山〇向の方〇見え〇す」と書いて了つた。先生も驚いて「此お子さんは妙な癖があります、どう云ふ譯でせう」と云ふ。尤も低能兒或は劣等生には折々斯う云ふ現象がある。然しこの兒は劣等生でも無い。成績はと尋ねると理科數學などは寧ろ優等です」と云ふ。それから私が調べて見ると、假名に限つて脫字してゐる。知つて居る假名であるが綴方の時に脫かす。そこで私は是は追憶の速度が遲いのだなと氣が付いたから、今度は假名ばかり書かせて見ると、いろは四十八文字を能く書くけれども、他の子供が二分間で書けるのを四分間掛る。そこで是は書けるけれども遲いのである。それから二週間ばかり毎日四十八字を書かして見ると、遂に二分間で樂々に書けるやうになつて、其の後間も無く惡い癖が消えて了つた。又靴を脫ぐ穿くと云ふことも同樣で、出來るといふだけではいけぬ、早く出來るやうでなければならぬ。

其次に必要なことは、親が時々學校へ出掛けることである。大きくなると「お父さん學校へ來ちやいけない」などといふが、尋常三四年迄は自分の親が行くことを何より樂んでゐる。運動會があると、お父さん來て御覽、お母さん是非お出なさいと云ふ。親が後ろに控へて居ると安心して居るのである。故に今朝出がけに妙な顏をして居ると思つたら、忙しい時でも學校を覗いて遣ることは必要である。高等師範の附屬小學校へ行つて見ると、何時でも五人や十人の父兄が教室の一方に列んで參觀して居る。斯う云ふ點は西洋よりも進んで居る。西洋では子供の時から自分の事は自分でする習慣を付けて居るから、學校へ附添つて行くことなどは必要がないのであらうが、日本では必要である。

次に子供がいろ〳〵と學校で學んで來たことを家へ歸つて親に報告するものであるが、それは規則のやうに毎日繰返させることが必要である。始めこそすれ、年月の經つに從つて親も倦んで來るものだが、我慢して是非つゞけて欲しい。そして家庭でも學校と歩調を揃へて子供を躾けて行つて欲しい。例へば毎晩齒を磨けと命ぜられたとするならば、それを勵行させるのである。こ

れは學科の復習よりも大切である。

さて學科の復習であるが、必ずしも全部復習させるには及ばないと思ふ。西洋では家へ荷物を持つて歸らないで、學校に置いて來る。家に歸つては復習も何もしない。勉強することは日本は世界第一である。否、實は少々過ぎる、過ぎるから身體を痛める、子供の發育もよくない。米國に居て大きくなつた日本人の子供は身長體重、共に日本居住の日本人の子供より大きい。亞米利加に於ける亞米利加人の子供の身長體重と、日本在住の日本人の身長體重との中間を占めて居る。これは日本内地の生活狀態のよく無いことを充分に證明して居るものである。

とにかく日本の子供に勉強する。さう勉強したからとて、其の割合に成績がよいものでもない。頭の働きには限りがあつて、さう無闇に勉強しても無用である。それよりも家庭に於ては學校で出來ないことをやるがよい。例へば日本の學校では實驗實習と云ふことを等閑にして居る。學校に其の設備がない、部屋がない。日本の經濟では已むを得ないのである。そこで之を補ふのは家庭である。例へば學校で百合の話を聞いたとする。實物が小さくて後ろの方に居る子供などは能く見えない。それを家庭に於て今日學校で學んだ通り、百合の花の實物に就いて說明を繰り返す。序に香を嗅がせたり、手に觸つて見せたりして、充分に觀察させる。本で見たり、話で聞いたことは、覺えても直に忘れてしまふが、實驗實習、實物に當つて觀察したことは却々忘れない。家庭に於てはさう云ふことに注意を向けるがよい。

次に最も大切なことは、親も子供と一緒に勉強することである。小學校でも五年六年になると子供が正しい字を書いて、親が噓字を書くことがある。或は又子供が正しい言葉を遣つて親が間違つた言葉を遣つて居ることが折々ある。これではいけない。どこまでも親が子供の間違を正すだけの素養を有つて居らなくてはならぬ。若し親にこれだけの素養があつて、朝夕子供の間違を正し得たとすれば、入學試驗の準備などにわざ〳〵教師を雇入れ、それ國語の先生、やれ歷史の先生と大騷ぎする必要はさら〳〵無い。私などは子供を四人中學に入れたが、先生も賴まなければ私も教へて遣つたことはない。全く自分だけで準備をさした。其の代り平素食事をしながらでも質問をする。欽明天皇の時に有りがたい教が日本に入つたがそれは何教か、耶蘇教だと答へると

それは違ふ、佛教だと教へる。又欽明天皇の紀元何年か、一二二二年と答へる、間違つて居れば直して遣る。斯う云つた風で談笑の間に復習させるのである。

斯う言ふと讀者は言ふだらう、「貴下は教育者だ、先生をやつて居るからそんなことが出來るのだが、我々には出來ませぬ」と。さう云ふことはない。何故ないかと云ふと、我々とても自分の專門とする學科以外のことは矢張り分らないが少し怪しいと思へば、直に本を見て確めるのである。若し母親が子供の本を見る。子供が一年生の時には、二年生の本を見る。さうして子供に、私が讀むお前が書取をして御覽といつた風に、子供と一緒にやつて勉强すればお母さんは素々基礎があるのだから、一寸やれば子供に負けることはない。さういふ順序を抜きにして置いて、五年六年になつて急に慌てるからいけないのである。金が掛かる上に子供の身體を痛める。どうか此邊に就て、從來の遣り方を改めて欲しいと思ふ。

最後に一つ、今まで日本のお父さんもお母さんも考へない教育法が一つある。是は多くの人も餘り言はないことであるが、私は特に此點は調べて居るから申述べて見る。

それは子供が學校へ行くやうになると必ず男女關係の事に就てよくない話を聞かされる。男と女と豆煎りだとか、或は怪しげな樂書を見せられたり、或は上級生に變なことを言はれたりする。さうでなければ、途中に居る車夫などが、お前は何處から生れたかなどとふざける。そこで、親は「そんな事を言ふものではありませぬ」と叱れば、子供は「途中では惡太郎や車夫が言つて聞かせた、家ではお父さんが言はない、何か面白いことだらう」と益々好奇心を唆るばかりだ。のみならず親子の間に水臭い關係が生じ、甚だ憂ふべきことになる。併し、日本に於ては、誰もこれをどうすればよいかと考へて居ない、之は甚だ遺憾なことである。

此の點について西洋の研究を紹介する。一體子供が五歳位になると盛に質問を發する。連立つて外出すると、これは誰の家、花子さんの家、これは、次郎さんの家、太郎さんの家、これは三郎さんのと、名を聞いただけで嬉しがる。又樹木を見て、これは何の木、柿の木、これは橙の木。親もさう〳〵名を覺えて居ない。すると、お父さんの知らない木が何故あるのかと不思議に思つて居る。此の頃を質問時代と云つて、何でも物を聞いて見たい時代であるから、子